第２章　建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動等の系譜

１　第２章の位置づけ

第１章では筆者の大学時代から現在に至るまでの「小さなまち旅」について紹介してきた。次の第３章で「モノ（地域資源）」「ヒト（人、組織）」「コト（ストーリー）」の視点で執筆を進めるにあたり、この第２章では建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの福岡市役所での業務及び姪浜でのまちづくり活動等を紹介することで、筆者の建築や地域づくりへの想いを伝えたい。

１　小さなまち旅

（１）現代建築を巡る旅

（学生時代～）

⇩

（２）歴史的建造物と町並みを巡る旅

（会社員時代～）

⇩

（３）景観づくりと地域づくりを巡る旅

（公務員時代～）

⇩

⇔

（４）現在の旅（2016熊本地震前後～）

①地域づくりや建築の原点に返る旅
②熊本の復興の過程を巡る旅
③身近なまち旅
④「アート」「歴史」「旅」「生き方」等をテーマにした旅

２　建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動、経験等

（１）学生時代の設計課題（1976.4～1980.3）

①場所性・地域性・空間特性・歴史性の尊重
②空間体験

（２）会社員時代のコンペ（1980.4～1986.2）

①場所性・地域性・空間特性・歴史性の尊重

（３）福岡市役所での関連業務

（1986.4～2018.3）

①地域特性を活かした住宅地開発
②地域固有の景観づくりと地域づくり
③広域連携に関する研究

（４）姪浜でのまちづくり活動の実践

（2007.3～2016.5）

①多彩な地域資源の発掘
②地域の魅力の地域内外への発信
③地域協働のまちづくり計画の策定
④景観まちづくりの実践

（５）まちなみネットワーク福岡での活動

（2013.8～）

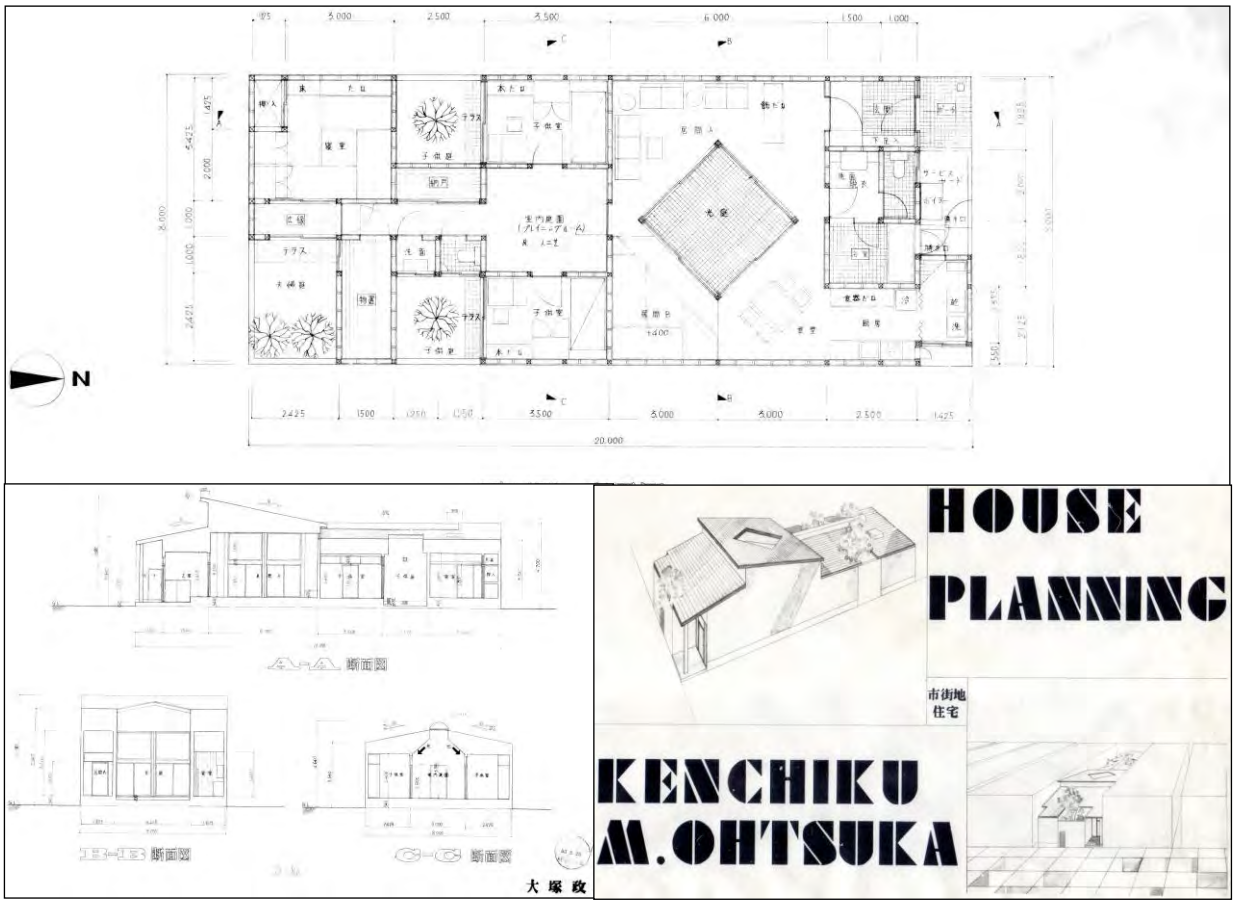
①福岡県内の歴史的町並み等の地域遺産の保存継承を目的としたまちづくりの情報交換及び交流

２　建築や地域づくりに関連する筆者のこれまでの業務、活動、経験等

（１）学生時代の設計課題

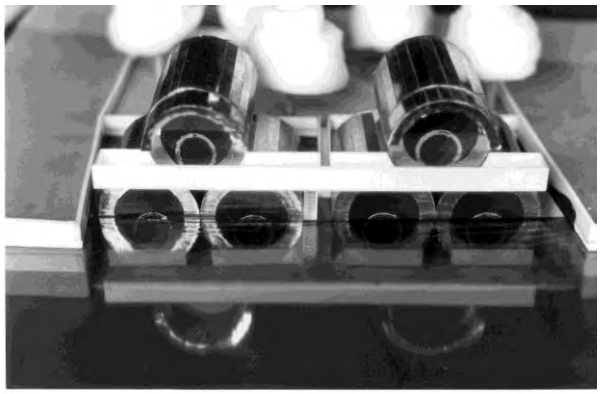
筆者の「その場所の特性を最大限に活かし、そこでしかできない設計をする」という徹底した考え方は、学生時代から身に付け始めたことであり、今でも筆者の建築やまちづくりでの哲学である。

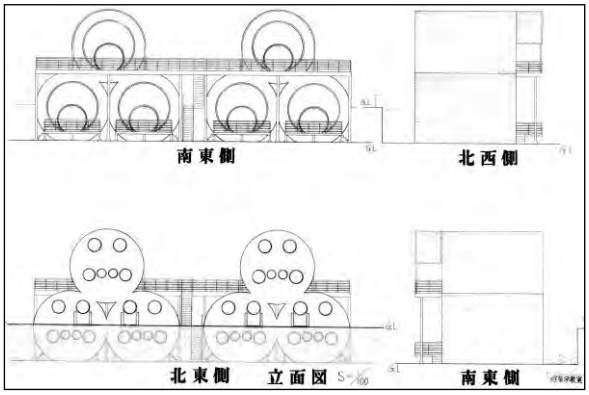
最初の設計は、２年生の時の都市型の敷地（間口８ｍ、奥行き 25mのウナギの寝床状の敷地）の上に建つ木造住宅である。意識したのは、周辺の環境が大きく変化しても、採光や通風、プライバシーを確保できるような住宅である。そのため、平屋建の建物を敷地いっぱいに配置し、広いリビングルームやダイニングルームの中央に３ｍ角の光庭を 45 度の角度で大胆に配置するなど、大小いくつもの光庭を取り入れた。



最初の設計課題（都市型住宅）

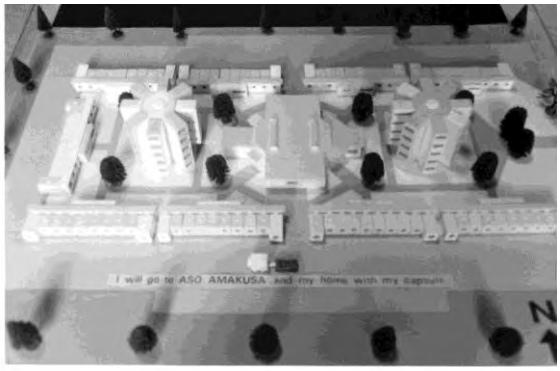
３年生になると、いろいろな設計課題に取り組むことになったが、ありきたりの設計ではなく、場所性やコンセプトにこだわることで、楽しさは倍増していった。海に面した６つの別荘である「SEASHORE WEEKEND COMPLEX」では、６つの円筒を使い、そのうち４つの円筒を海に沈め、干潮時には海に出て楽しめ、満潮時には窓越しに魚が見えるように計画した。上の２つの円筒では、満潮時に魚釣りもできる。また、海に面した大きな窓は、カメラの絞り機能をイメージし、外の明るさに合わせて光を調節できるように計画した。

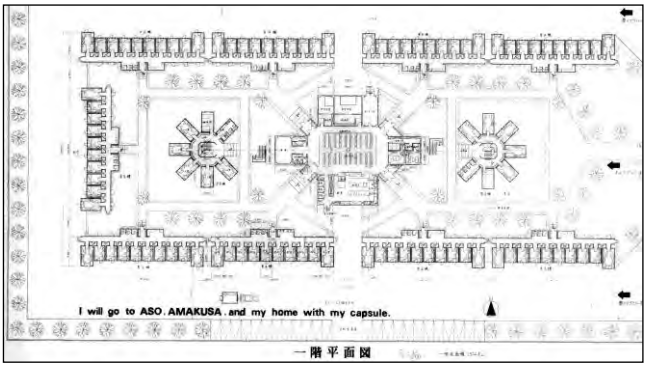




SEASHORE WEEKEND COMPLEX

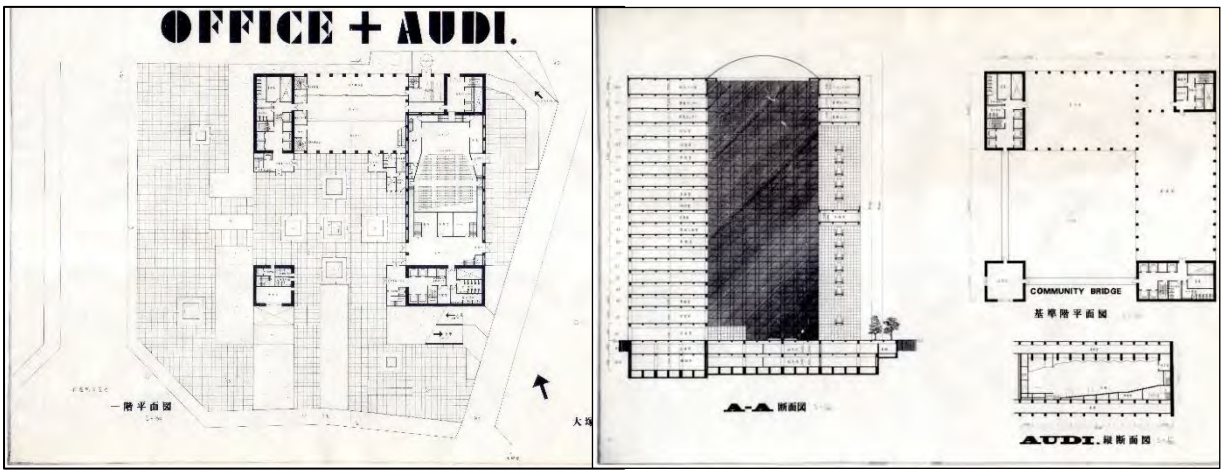
「熊本大学学生寮」の設計では、外周の１階のすべての部屋は取り外し可能なカプセル形式（タイヤ付き）とし、車で引いて移動できるモバイルハウスとした。阿蘇や天草等への旅行の他、自宅に帰る時にも使えるように計画した。





熊本大学学生寮

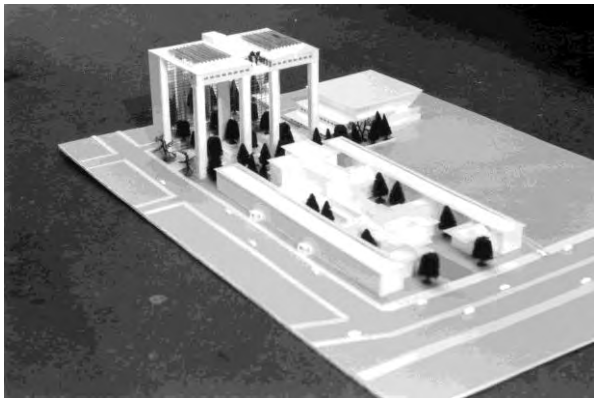
また、「オフィス＋オーディトリアム」の設計では、L字型のオフィスと独立したコア（休憩室空間）にコミュニティブリッジを配するとともに、最上階にガラスの屋根を架け、大規模なアトリウム空間を確保した。このブリッジを渡ることで、同じ会社に働くという一体感が生まれることを意図したものである。空間体験を通したコミュニティという意識が芽生えた時期である。



オフィス＋オーディトリアム

学生時代の締め括りとなる卒業設計では、筆者は当時話題になっていた建築会館の建て替えを参考として、建築に携わる方々が利用する複合施設「Architectural Complex」を計画した。まず考えたことは、『４年間建築を学んで、筆者が最も体験したい建築空間は何か』ということであった。いろいろな建築巡りをする中で、素晴らしい建築空間を体験することの重要性を痛感していたからである。

国内のいろいろな建築の中から、筆者はフランク・ロイド・ライトが設計した旧帝国ホテルの活用を考えた。旧帝国ホテルは既に解体され、一部は愛知県の明治村に移築されており、現実性はなかったが、旧帝国ホテルを博物館として活用しながら、会議室、オーディトリアムなどの機能を新たに付加させていったものである。



明治村にある旧帝国ホテル（左）と筆者の卒業設計時のボリューム模型（右）

（２）会社員時代のコンペ

会社員時代の前半の２年間は、時間外に建築のコンペに何回もチャレンジした。テーマは学生時代に引き続き、場所性・地域性・空間特性・歴史性の尊重である。入賞することはなかったが、場所性やコンセプトにこだわり、自分の想いを組み立てていく作業は、その後の景観づくりや地域づくりの取り組みに活かされていると思う。

ちなみに新建築社の住宅設計競技 1980 の「歴史と現代の接点にたつ家」という課題に対して、当時の筆者は原広司氏が設計した「粟津邸」をイメージしていた。粟津邸は住宅の中に都市が入り込んだ空間が特徴で、中央上部のトップライトからの光が内部のドーム型のトップライトを通して、各居室に光が入る仕組みになっている。世界中の集落調査を実施している原氏ならではの住宅であり、筆者も大学時代に影響を受けた住宅の一つである。

コンペへの参加

（３）福岡市役所での関連業務

32年にわたる福岡市役所での業務の中で、景観づくりや地域づくりへ活かされているのは、「地域特性を活かした住宅地開発」「地域固有の景観づくりと地域づくり」「広域連携に関する研究」である。

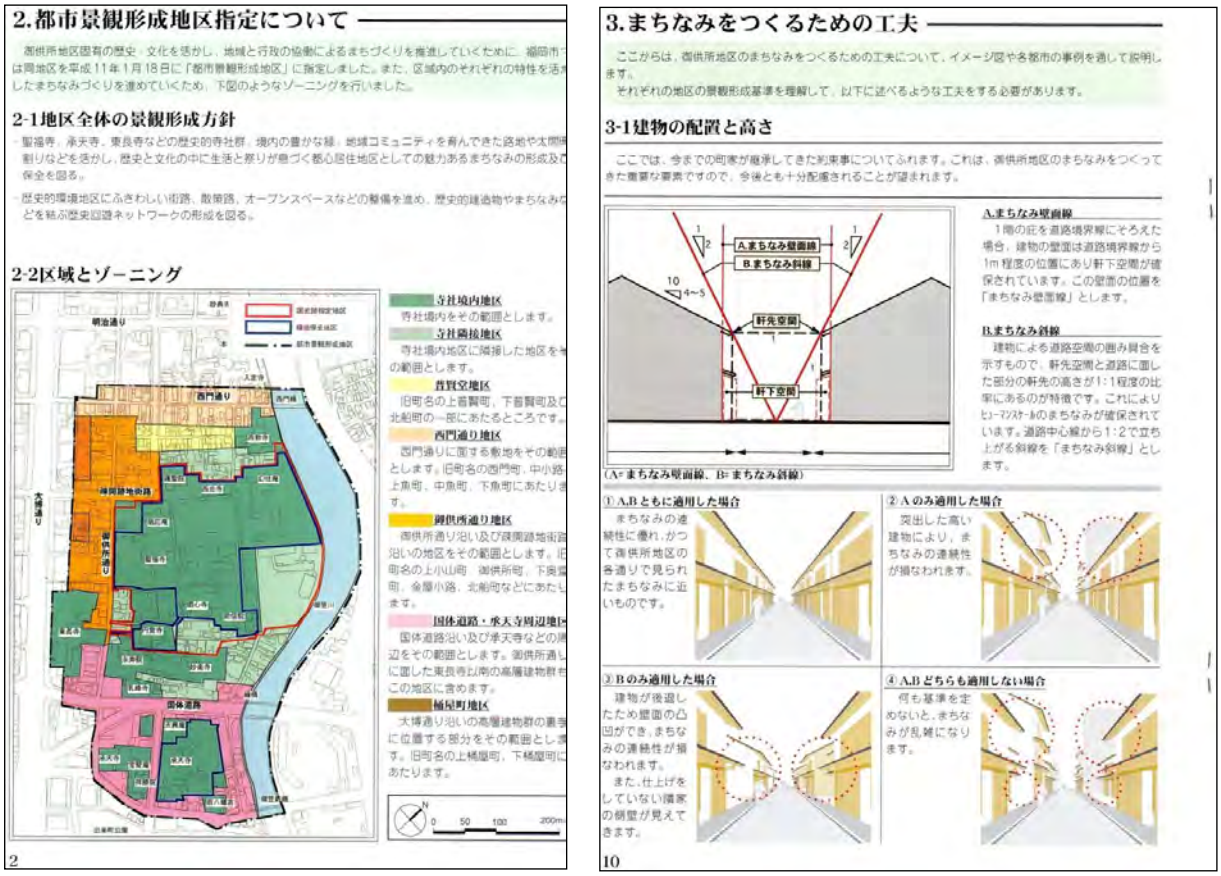
まず、地域特性を活かした住宅地開発の代表が「シーサイドももちクリスタージュ」である。クリスタージュでは、シーサイドももちに立地する最大の特徴である博多湾への眺望を最大限に活かし、外観計画や配置計画、住宅のプラン等を公社全体で検討した。今までの福岡のまちづくりは博多湾に背を向けてきたが、シーサイドももちでは博多湾に近いという特性を活かすことが求められた。建築計画においては、エレベーターや階段を二戸一形式にすることで、北側の居室からの眺望の確保が可能となった。また、冬は日当たりの良い南側の居室をリビングルームとして使い、夏は眺望の良い北側の居室（寝室）をリビングルームとして使う「リバーシブルリビング（ダブルリビング）」も採用し、これを積極的に PR していくことになった。

竣工直後のクリスタージュ（1992 年6月。福岡市住宅供給公社提供）

次は都市景観室時代の都市景観形成地区の指定である。これは、都市景観条例に基づき、地域が主体となって、それぞれの地域の特性を活かした景観まちづくりを進めていく手法である。この中で、筆者の思い出に残るのが新しいまちづくりが進むシーサイドももち地区と福岡市有数の歴史的環境地区である御供所（ごくしょ）地区である。都市景観形成地区に至るまでの経緯やその後の状況は2016 年度の活動記録に記しているが、景観に軸組を置いたまちづくりこそが地域の個性を創出していくものであり、そうした地域個性の集積が福岡市全体の魅力を高めていくものである。

都市景観形成地区：シーサイドももち地区（左）、御供所地区（右）

シーサイドももち都市景観形成地区　景観形成ガイドライン



御供所都市景観形成地区　景観形成ガイドライン

福岡市役所時代にもう一つ印象に残るのが「広域連携」についての研究である。これは福岡都市科学研究所（現(公財)福岡アジア都市研究所）が 2001～2002 年度に「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」を実施したもので、筆者は事務局を担当した。研究報告書の中で事務局が「事例にみる広域連携の意義と効果」を執筆したが、その時の考察の中で身近な地域づくりに関するものは次のとおりである。

なお、事例として筆者が実際に訪問し参考としたのは、長野県小布施町、長野市（善光寺周辺、松代地区）、須坂市、熊本県小国町、南小国町、東京都世田谷区、群馬県川場村、宮崎県五ヶ瀬町、

福岡県浮羽町（現うきは市）の他、海外ではドイツのシュトゥットガルト、イギリスのウエスト・ミッドランド地域等である。浮羽町のつづら棚田のオーナーとして都市と農村の交流・連携活動に参加したのもこの頃である。この時の経験がその後の姪浜でのまちづくり活動に活かされることになるのである。

「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」の中での
「事例にみる広域連携の意義と効果」より、筆者の地域づくりの考え方を示すものを抜粋

1　魅力ある地域づくりと広域連携

■広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

・広域連携のベースにあるのは、それぞれの地域の資源（自然、歴史・文化、産業、人材等）を活かした地域づくりであり、広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

■経済や人口規模の大小だけが都市の豊かさの指標ではない。真の豊かさとは、魅力ある地域づくりがもたらす人々の地域に対する誇りである。

・人を惹きつけるのは、都市規模（経済や人口規模）の大小ではなく、地域固有の資源を活かしたまちづくりである。今後は、「心の豊かさ」「文化の豊かさ」「環境の豊かさ」「景観の豊かさ」「人との関係の豊かさ」等が都市の豊かさの重要な指標となる。

・都市の豊かさとは、「真に魅力ある地域づくりがもたらす、人々の地域に対する誇り」である。

■交流人口（交流のまちづくり、観光のまちづくり）による地域の活性化

・人口減少社会において定住人口を増やすことは難しく、地域外からの来訪者（交流人口）をいかに増やしていくかが地域活性化の大きな課題である。そこでは、経済効果だけでなく、情報・文化の交流効果が求められている。

・今後は、従来の物見遊山的観光やテーマパーク型観光ではなく、個性豊かな町並みと地域づくりを体験する旅や、農山村の魅力（自然、食、人等）を体験するグリーンツーリズム等、地域社会（住民）、地域の資源、来訪者の三者がうまく調和した「観光まちづくり」という視点が重要になる。

・中心市街地を活性化するには、商業だけの魅力では限界があり、地域の歴史・文化資源のまちづくりへの活用、情報・文化の交流、そして楽しく歩いてもらえる歩行者優先の道路づくり等の視点を取り入れた「観光まちづくり」への転換が求められている。

■地域づくりの情報発信

・地域づくりで成功している市町村に共通することは、地域づくりや情報発信、交流の拠点となる組織や施設がしっかりしている。

・面白い地域づくりを展開している市町村には、地域の歴史・文化、特産品、まちづくり等の情報をわかりやすく発信する読み物としての「地域づくり読本」がある。地域づくり読本は、訪れる人が地域を知るうえで大変役に立つ編集・構成になっていると同時に、地域の人々が地域の資源を再確認することで、地域に対する誇りや愛着を創出するという効果もある。

2　相互に補完関係にある都市と農山村の継続的で対等な交流の推進
3　都市機能の相互補完と広域連携
} 省略

また、この研究では、広域連携のメリットをいかにわかりやすく伝えていくかが大きな課題であった。そのため、地域デザイナーの高山美佳氏に依頼して研究の成果を「ひろがる つながる」というわかりやすい絵本にしていただいた。筆者の長男が田主丸に遊びに行った時のことが印象に残り、長男をモデルにしたそうだ。研究には専門家だけでなく、市民にわかりやすく伝えていく視点が大切である。これは地域のまちづくりにも同じことが言えるのである。

広域連携は毎日の暮らしの中にあります

広域連携物語
「ひろがる つながる」

「広域連携」とは一見難しいことのように感じられますが、実は私たちの暮らしのあらゆるシーンに関わっています。
今や私たちの生活範囲は、行政区とは別の枠がりを持ち、日常生活に欠かせないものとなりつつあるインターネットによって膨大な情報が日々行き交っています。
そんな中、人々の価値観も多様になり、「地域の豊かさ」は、これまでのような経済という物差しなどでは一概に計れなくなりました。お互いにないものを補い合う地域、活躍の場を一層拡げるまちづくりグループやNPO。共感できる考えを持つ人々が地域の枠を超えてネットワークを築いています。興味や関心さえあれば、暮らしはもっと豊かで、おもしろくなる「広域連携」はその可能性の鍵を握るキーワードです。
広域連携物語「ひろがる つながる」は、福岡市の町なかに暮らす家族が、一村のご飯をきっかけに出かける小旅行を通して、日々の暮らしの中にある広域連携の風景を描いた絵本です。研究報告書やその概要版と並ぶひとつの成果であり、実在する自然環境、町や農村、NPOの人々が登場します。
小学生でも子にとって読めるような構成で、巻末には主人公の「ぼく」の疑問への答えや、モデルとなった広域連携にまつわる実例、話題を紹介しています。地域の個性、都市の営生活を支える農村、水道水と森とのつながりなどを改めて知る「ぼく」たち家族、その姿を通して、自分たちが暮らす地域の魅力を改めて振り返り、足を運んで体験することのおもしろさを伝える一冊です。

ひろがる
つながる

広域連携物語

左：筆者は浮羽町（現うきは市）つづら棚田のオーナーとして都市と農村の交流・連携活動に参加
右：「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」報告書概要版より抜粋

（４）姪浜でのまちづくり活動の実践

姪浜でのまちづくり活動については、2016～2017 年度の研究に詳しく記載しているが、それぞれの段階のまちづくりの課題や熟度に対応した目標を掲げ、「こだわり」「おもてなし」「多彩」「粘り強さ」「地道」をテーマにした 10 年間の精力的な活動により、姪浜の魅力及び協議会の活動を全国に発信してきた。

筆者の姪浜での活動のひとこま

姪浜における各段階の地域課題と活動目標

段　階	地域課題	活動目標
1st ステージ (2007～2009 年度)	○地域住民自身の地域の魅力の認識不足	○地域の魅力の再認識と地域内外への発信
2nd ステージ (2010～2013 年度)	○地域のまちづくりの方向性が不明確 ○まちづくりの効果の具現化 （具体的に目に見える形で示す）	○地域協働のまちづくり計画の策定 ○景観まちづくりの実践
3rd ステージ (2014～2015 年度)	○景観づくりの実践に向けた意識高揚 ○地域の歴史的･景観的シンボルであるマイヅル味噌のみそ蔵の再生･活用 ○みそ蔵に代わる地域のシンボルとなる新たな魅力スポットや、姪浜らしさにこだわった多彩な事業の発掘・発信	○国の登録文化財のみそ蔵を中心とした姪浜のまちなみの個性の再構築 ○次のステージに向けた『姪浜ネクスト』の推進

姪浜でのまちづくり活動のポイント（筆者が事務局長として工夫したこと）

①各段階の地域課題に対応した長期的展望に立った多彩なまちづくり活動の推進
②地域に埋もれている身近な魅力資源の掘り起こし
③ヨソモン（地域外の人間）、ワカモン（若者）の視点の活用
④計画策定における住民参加、地域との対話や双方向性の確保
⑤関係団体、住民、商店、寺社、大学、行政等との協働関係の構築
⑥姪浜らしさにこだわった多彩な事業の推進
⑦マスコミへの情報発信
⑧協議会に参加している地域内外の人々の多様なノウハウ・スキルの活用
⑨全国区の助成金へのチャレンジ
⑩各種賞の受賞による情報発信

⇩

継続的で多彩なまちづくり活動の成果

（筆者が在籍した 2016 年５月までの成果）

①地域住民の地域への誇りや愛着の創出
②活動の広がり
③地域の歴史・文化・暮らしを踏まえたまちづくりや景観づくりの方向性の共有
④まちづくりの効果を具体的に目に見える形で地域に示す（まちづくりの効果の具現化）。
⑤地域資源の保全・活用に向けた意識醸成と双方向のまちづくりへの展開
⑥全国的な評価及び姪浜の魅力の全国への PR、地域への情報発信
⑦身近な地域資源を活かしたまちづくりの他地域への波及効果（今後期待）

※「姪浜でのまちづくり活動の実践」については、2017 年度報告書第１章参照

（５）まちなみネットワーク福岡での活動

まちなみネットワーク福岡は、福岡県内の歴史的町並み等の地域遺産の保存継承を目的としてまちづくりを進めている様々な主体が、協調・連携を図りながらそれぞれ地域の歴史的文化遺産の保全に資することを目的として 2013 年８月に組織されたものであり、2013 年度から毎年１回、各都市持ち回りで「まちなみフォーラム福岡」を開催し、課題や対応策等について精力的に意見交換を行っている。

まちなみフォーラム福岡の開催状況

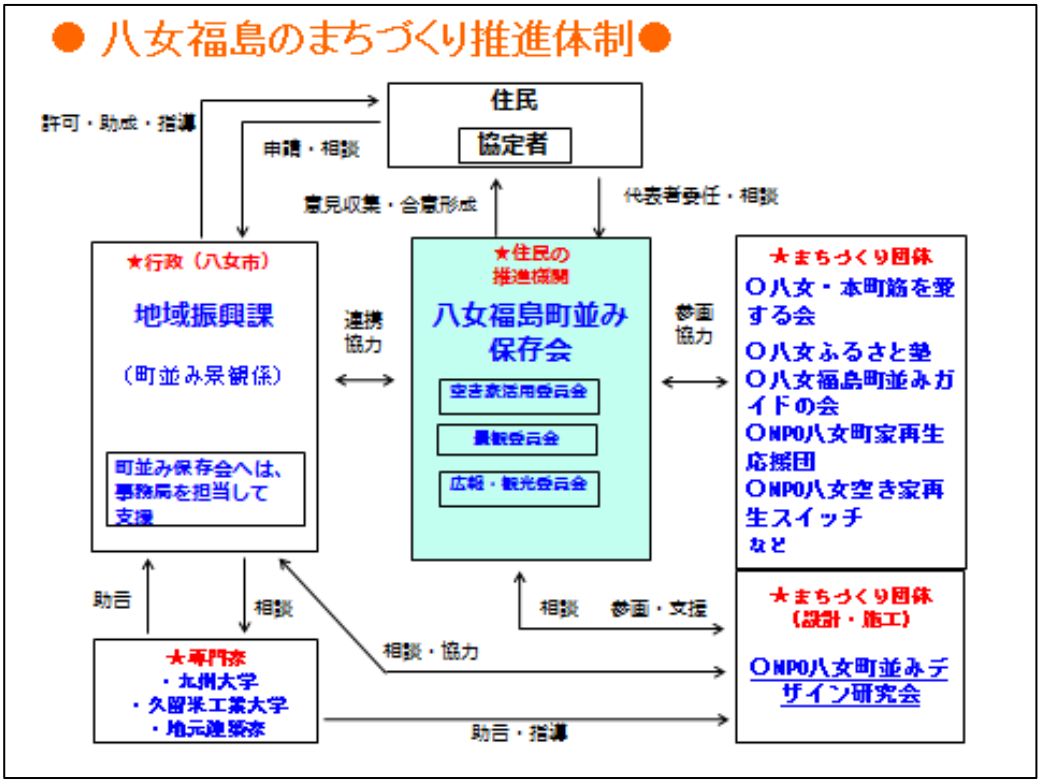
回数	開催年月日	開催地	スローガン等
1回	2014(H26)年 3月29日	福岡市 唐津街道姪浜	「住んでよし、訪れて楽し」のまちづくり
2回	2014(H26)年 11月29日	大川市 小保・榎津	町並みにふさわしい修理・修景の実践へ
3回	2015(H27)年 11月13～14日	飯塚市 内野宿	江戸の面影が今も残る 長崎街道・内野宿の復原へ
4回	2016(H28)年 9月17日	福津市 津屋崎	町家の再生活用と町並み景観の保全 （絶景の道100選・認定1周年記念）
5回	2017(H29)年 9月30日～ 10月1日	八女市 八女福島	再生・空き町家、つなげよう地域の活力 （重伝建地区選定15周年）
6回	2019(H31)年 2月23日	八女市 黒木	町家に輝きを まちに賑わいを 取戻そう （重伝建地区選定10周年）
7回	2019（R1）年 11月2日	福岡市 唐津街道箱崎宿	町並みや町家を未来につなぐ

まちなみフォーラム福岡の様子

まちなみネットワーク福岡に所属する地域で、特に成果を上げているのが八女福島である。八女福島においては町並み保存会を中心に、住民、各まちづくり団体、専門家、行政が役割分担しながら連携を取り合ってまちづくりを進めている。特徴的なのは「町家の伝統様式や伝統構法を習得し継承していく活動を展開している団体」や「空き町家の保存活用を担う団体」が組織され、

相互に連携して活動を展開していることである。様々な地域課題に対し、いろいろな団体を巻き込み、地域全体として取り組んでおり、それが地域全体に波及し、地域の共感を得、その好循環を繰り返しながら町並みの保全整備が進んでいる。他の地域でも大いに参考にしていただきたい。

八女福島の町並み



八女福島のまちづくり推進体制

（「第5回九州・沖縄町並みゼミ八女福島大会&第5回まちなみフォーラム福岡　配布資料」より引用）

※「まちなみネットワーク福岡所属団体の取り組み」については、2017 年度報告書第２章６参照

第３章　画一化する街並みの中で地域個性のあり方についての考察 ～小さなまち旅の実践等から得たモノ・ヒト・コトを通して～

１　視点の整理

（１）これまでの福岡市役所での業務やまちづくり活動の実践から得た視点

筆者は2016～2017年度の研究で、これまでの福岡市役所での業務やまちづくり活動の実践を踏まえ、身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践に向けて提案している。これを「モノ（地域資源)」「ヒト（人、組織)」「コト（ストーリー)」の３つの視点で再整理すると次のようになる。

これまでの福岡市役所での業務やまちづくり活動の実践から得た視点

◆モノ（地域資源）

○その地域ならではの魅力資源の評価
- 明確な地域資源の維持継承
- 多彩な地域資源の評価

○画一化する街並みの中で見えにくくなりつつある地域資源の発掘・評価・活用
- 今あるモノを活かすことが大事。新しいモノは要らない。

◆ヒト（人、組織）

○地域のまちづくりに求められる視点、まちづくり人に求められるもの
- 老若男女それぞれの視点
- ヨソモノ（地域外の人間）の視点
- まちづくり人に求められるのは、「地域への想い」「前向き思考」「包容力」「相手への配慮（リスペクト)」

○地域に根ざしたまちづくり組織
- 組織の使命（ミッション）
- 地域資源の再認識と掘り起こし
- 地域ブランドの構築（地域らしさ、情報発信、地域の共感）
- ドーパミンの出るまちづくり（チャレンジの連続と自省）
- 巻き込み力

○地域内の各団体の連携による活動の広がり
- 各団体の垣根を越えた地域全体としての取り組み

◆コト（ストーリー）

○各地域のそれぞれの魅力資源を活かしたまちづくり
- 地域の風土・歴史・文化の尊重
- 各地域の風土・歴史・文化を活かした町並みの維持継承
- 身近な魅力資源を活かしたまちづくり

○まちづくりの課題や段階（ステージ）に対応した取り組み
- 各段階の地域課題⇒目標設定⇒活動の推進⇒振り返り
  ⇒新たな課題や動向への対応⇒新たな目標設定⇒活動の推進⇒振り返り

※この好循環の繰り返し

（２）小さなまち旅から得た新たな視点

次に、小さなまち旅（特に熊本地震前後から現在までの旅）から得た新たなことを「モノ（地域資源)」「ヒト（人、組織)」「コト（ストーリー)」の３つの視点で整理すると次のようになる。

小さなまち旅から得た新たな視点

◆モノ（地域資源）

○多様なテーマから地域づくりのヒントを考える

・鳥の目・虫の目の視点で地域を見る（風景、気候、地形等の広域的空間から見慣れた身近な空間まで多様なテーマが存在する)。

・多様なテーマの中にそれぞれの地域づくりのヒントがある。

○地域個性の把握

・人が十人十色なら、地域も十域十色

・地域の個性が見えにくくなっている中で、まちをじっくりと観察しながら歩くと、地域固有の環境や雰囲気、建築材料等を確認できる。

◆ヒト（人、組織）

○小さなまち旅のすすめ

・ネット上だけではなく、実際に旅に出て自分の眼で実物を見て、都市や地域、建築を見る感覚を磨く。旅のテーマは地域の風景、町並み、建築、食、特産品など様々である。

・それぞれの地域の空気と背景（歴史、気候、成り立ち等）を知ることで、地域の個性を把握する。

・旅で得た体験や情報を自分の住む地域に置き換えて考えてみる。

○樹木や花から景観の美しさ、組織のあり方を考える

・桜並木やイチョウ、ケヤキの紅葉のグラデーションに見る「多様性の中の統一」「組織運営（多様な個人と組織)」

◆コト（ストーリー）

○場所性や地域固有の材料を活かした建築と地域づくり

・場所性（空間特性)、地域に昔から存在する材料へのこだわりが、その場所ならではの建築や地域づくりにつながる。

○広域連携による地域づくり

・地域の個性が見えにくくなっている中で、広域的空間の中での対比によって地域の個性を浮き彫りにする（輝かせる)。

・広域連携により、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、地域全体としての魅力も高める。

○点・線・面による地域づくりがもたらす地域のアイデンティティ

・魅力ある点（施設、空間等）を増やすことで線（沿道空間等）となり、さらに増やすことで面（個性ある地域）となる。魅力ある点の集積が線となり、面となり、地域全体の魅力を増進させ、地域のアイデンティティとなる。

２　画一化する街並みの中で地域個性のあり方についての考察

前述の２つの視点を統合し、身近な地域資源を活かしたまちづくりを「モノ（地域資源）」「ヒト（人、組織）」「コト（ストーリー）」に分けて再整理し、筆者が実際に訪問した地域の事例を紹介しながら、『画一化する街並みの中で地域個性のあり方』について考察する。

（１）モノ（地域資源）

【その地域ならではの魅力資源の評価】
- 明確な地域資源の維持継承
- 多彩な地域資源の評価

【画一化するまちなみの中で見えにくくなりつつある地域資源の発掘・評価・活用】
- 今あるモノを活かすことが大事。新しいモノは要らない（まちをじっくりと観察しながら歩くと、地域固有の環境や雰囲気、建築材料等を確認できる）。
- 地域は十域十色（広域的視点での対比により地域の個性を浮き彫りにする）

【多様なテーマから地域づくりのヒントを考える】
- 鳥の目・虫の目の視点で見ると、広域的空間から見慣れた身近な空間まで多様なテーマが存在する。
- 多様なテーマの中にそれぞれの地域の地域づくりのヒントがある。

【その地域ならではの魅力資源の評価】

①重要伝統的建造物群保存地区

魅力資源が明確で、地域の風土や歴史、文化が息づく最たる例は、我が国固有の歴史的な町並みであろう。北海道から沖縄まで気候、風土、文化等が異なり、それに応じた個性豊かな町並みが形成されてきた。宿場町や門前町、武家屋敷や城下町、在郷町、社寺町等の多くの歴史的な町並みが、少子高齢化の進行、後継者不足等の様々な課題を乗り越えて、多くの人々の地域への誇りと努力、そして自治体や国の強い支援によって維持継承されている。そして、国内外から多くの来訪者が訪れ、地域の方々との交流を通じて、その魅力を体験体感している。

重要伝統的建造物群保存地区：下郷町　大内宿（左）、倉敷市　倉敷川畔（右）

筆者がよく訪れる身近な場所としては、八女福島や筑後吉井、肥前浜宿等の町並みがあり、地域の生活や文化等に根ざした伝統的な町並みが形成されている。現在、全国には 123（2020 年 12 月 23 日現在）の国の重要伝統的建造物群保存地区がある。町並みの維持継承には様々な課題

があるが、今後も官民一体となって、各地域固有の風土や歴史を活かしたまちづくりを進めていってほしい。

重要伝統的建造物群保存地区:うきは市 筑後吉井(左)、鹿島市 肥前浜宿(右)

②重要文化的景観

重要伝統的建造物群保存地区以外にも各地域に根づく景観は多く存在する。筆者が訪問した地域で特に印象に残っているのが、国の重要文化的景観に選定されている長崎市外海(そとめ)集落と天草市﨑津集落である。外海集落は練壁（結晶片岩の石に赤土及び藁すさを練り込んで築いた伝統的な石壁）やド・ロ壁（パリ外国宣教会のド・ロ神父によって藁すさに代わり赤土に石灰を混ぜる練積みの石壁）等の多種多様な石積み構造物による景観が大きな特徴であり、初めて訪れてもその特徴がすぐわかる。

﨑津集落は羊角湾の穏やかで青緑色の海が印象的な漁村集落である。ゴシック様式の﨑津教会を中心にトウヤ（軒を連ねる家々に挟まれ形成された海に出るための小路）やカケ（船舶の碇泊や漁具の整備・魚干しなどの生業施設である海上に張り出した構造物）等により特徴的な漁村景観を形成している。

重要文化的景観:長崎市 外海(そとめ)集落(左)、天草市 﨑津集落(右)

この他にも筆者がよく訪れる身近な場所としては、阿蘇の草原景観や三角浦の文化的景観（宇城市）、小鹿田(おんた)焼の里（日田市）、田染荘(たしぶのしょう)小﨑（豊後高田市）の農村景観等があり、日々の生活に根ざした身近な景観が形成されている。現在、全国で65の国の文化的景観が選定されており(2019年 10 月 16 日現在)、その文化的な価値を正しく評価し、地域で守り、次世代へと継承していっ

てほしい。

重要文化的景観：宇城市 三角浦（左）、日田市 小鹿田（おんた）焼の里（右）

③都市景観条例に基づく都市景観形成地区

市町村の景観条例に基づき指定されている都市景観形成地区等（市町村により名称が異なる）も地域の個性を将来にわたり保全活用する制度であり、歴史的環境地区や都心部地区、ウォーターフロント地区等それぞれの地域の特徴を活かした景観形成が進められている。こうした地域をモザイク的に増やしていくことが市町村の重層的な魅力形成につながっていくのであり、地域と行政の協働により様々な地域で展開していってほしい。

筆者が精力的に関わった福岡市の都市景観形成地区：御供所（ごくしょ）地区（左）、シーサイドももち地区（右）

那覇市の都市景観形成地域：首里金城地区（左）、壺屋地区（右）

筆者が福岡市で景観行政に関わり始めた 1990 年代は地域の方々から「景観で飯が食えるか」とよく言われたものであるが、現在は魅力的な景観を求めて国内外から多くの方々が訪れるようになったことを大変嬉しく思う。

④印象に残る制度

筆者が訪れた地域で制度的に印象に残っている地域がある。その一つが島原市の森岳商店街である。ここでは、古い町家や商家を「登録有形文化財（文化庁）」「まちづくり景観資産（長崎県）」「まち並景観賞（島原市）」の制度で認定することで、歴史的景観を活かしたまちづくりを進めており、古い町並みと調和した商店（酒屋、金物屋、レストラン等）が人気となっている。

島原市森岳商店街の町並み

長崎県の「まちづくり景観資産登録制度」を調べてみると、次のように記されている。

> **まばゆい海と豊かな山に囲まれた長崎県。**
>
> **それぞれの地域によって地理条件や歩んできた歴史は異なり、武家屋敷通りや町屋が残る商店街、坂沿いの洋館群、海辺の漁業集落や棚田など、県内は個性的で魅力あるまちなみや建造物にあふれています。**
>
> **景観資産登録制度は、そんなまちなみや建造物、さらに地域のシンボルとして愛されている樹木などを登録することで県内外に広く周知し、ゆるやかに保全を行う、長崎県独自の制度です。**
>
> （出典：長崎県ホームページ）

国や市の景観に関する支援制度はあるが、県レベルでこうした独自の取り組みを行っているところは珍しいのではないだろうか。長崎県では 2003 年の制度創設以来、まちなみ 29 件、建造物 195 件、樹木５件を登録している。

筆者は現在の仕事の関係もあり長崎県内のいろいろな場所を訪問する機会は多いが、その中で印象に残っているのがまちづくり景観資産に登録されている「陶郷・中尾山」の集落景観である。ここは江戸時代の正保元年（1644 年）の磁器の生産開始以来、国内有数の焼物の里として知られている波佐見町南東部の集落であり、谷間の空に伸びるレンガ造りの煙突群が陶芸の里としての佇まいを残し、個性的な産業景観を生み出している。こうした地域固有の景観を国、県、市町村の制度を最大限に活用して地域内外にその魅力を伝えていってほしい。

長崎県のまちづくり景観資産に登録されている波佐見町の中尾山集落の町並み

【画一化する街並みの中で見えにくくなりつつある地域資源の発掘・評価・活用】

地域の個性が明確な地域が一部にある一方で、多くの地域では都市化に埋没して地域の個性が見えにくくなってきているのも事実であり、むしろそうした地域の方が圧倒的に多いのではないだろうか。そうした中、地域の人が見慣れて、当たり前だと見過ごしているものにスポットを当てていくことが、その地域ならではのまちづくりを進める上で重要になる。町並みとして連続していなくても、点在する身近な地域資源を発掘し、それを身近なまちづくりの中で活用していくことで、地域の方々にとっては地域への誇りや愛着につながっていくのである。

① 筆者が実践してきた姪浜

筆者が 10 年間、精力的に活動してきた姪浜の場合は伝統的な町家が連続しているわけでなく、ややもすると通り過ごしてしまいそうな町並みであるが、じっくりと歩いてみると多彩な歴史、伝説・物語、数多くの寺社・町家、狭い路地、海、港、魚市場、美味しい魚等の多くの魅力資源が存在する。その中には、地域の方々によく聞いてみないとわからないような「身近なまちかど遺産」を発見することができる。そうした魅力資源をまち歩きマップやかわら版等で地域内外の方々にわかりやすく伝えていくことが重要である。それが地域への誇りや愛着につながっていくのである。筆者はこうした視点を大切にして姪浜での活動を展開してきたが、これは他の地域でも大いに応用できると考えている。

筆者がまちづくり活動を始めた 2007 年頃の姪浜の町並み

姪浜の多彩な魅力資源を紹介したまち歩きマップ（「唐津街道姪浜まちづくり協議会」発行）

姪浜の魅力資源集（唐津街道姪浜まちづくり協議会在籍中に筆者作成）

②小さなまち旅での地域個性の発見

いろいろな地域を歩いて観察してみると、ふとした発見をすることがある。その一つが別府石を使った塀である。筆者は仕事で別府市の上人ヶ浜温泉に行った時に、周辺の住宅地で数々の石積み塀を見かけたが、これこそが地域に根ざした景観なのではないかと直感した。

別府では別府駅から山の手にかけて多くの石塀を見かけるが、調べてみると大正時代前後に別荘地や高級住宅地が盛んに造成された時に掘り出された別府石（鶴見山が噴火した時の角閃安山岩が朝見川や境川を下り、丸石となってできた小石）が塀として使われたとのことである。

こうした地域固有の資源を活用し、景観形成に役立ててほしいものである。建物は建て替わっても塀を統一することで、多様性の中にも統一感と連続性の感じられる景観が実現でき、それが地域の個性になっていくのである。筆者が訪問した大村市の武家屋敷街や対馬市厳原でもそれを実感することができた。

別府市 上人ヶ浜温泉周辺の住宅地で見かけた別府石の塀

別府市 別府駅から山の手方面で見かけた別府石の塀

大村市 上小路武家屋敷街の町並み

対馬市 厳原の町並み

③広域的な視点から探る地域の魅力

仕事の関係で１～２両編成のローカル線に乗る機会も多いが、各駅や車窓からいろいろな発見をすることができる。例えば、松浦鉄道では多くの駅で桜を植えており、桜の咲く頃になると浦ノ崎駅や吉井駅、久原駅は多くの来訪者で賑わっている。また、松浦鉄道では沿線の学校に協力してもらって駅に壁画を飾る事業を進めており、全 57 駅中 40 駅で心のこもった絵を見ることができる（2019 年３月現在）。

そして、松浦鉄道の沿線には有田焼や伊万里焼、有田内山地区の伝統的な町並み、教会や集落、棚田、アジフライに代表される食等の多くの魅力資源が存在する。一つひとつの駅は点であるが、松浦鉄道沿線を一つのエリアと考えれば、それぞれの地域の個性がより明確になり、県域や市町村域を超えた様々な広域連携による地域づくりが可能になるのではないだろうか。

松浦鉄道浦ノ崎駅：桜並木（左）と壁画（右）

松浦鉄道沿線の魅力の一例：有田のドンバイ塀（左）、伊万里焼（中）、アジフライ（右）

また、広域連携という視点に立つと、大村湾沿岸の市町（長崎市、佐世保市、諫早市、大村市、西海市、時津町、長与町、東彼杵町、川棚町及び波佐見町）にも多くの魅力資源が存在する。筆者は JR 長崎本線や大村線を利用して各地域を訪問したり、車窓からの景観を楽しんでいるが、いろいろな魅力資源を確認することができる。両端にある長崎市や佐世保市の魅力は様々な形で紹介されているが、ここでは中間にある大村市や東彼杵町の魅力を中心に紹介したい。

大村市は大村藩の城下町であり、石垣や花の美しい玖島城跡、今も生活が息づく４つの武家屋敷通りと風情ある石垣、海と密接な関わりがあった大村藩や玖島城跡の性格を示すお船蔵跡、大河ドラマのロケ地となった古松の美しい寺島、斜面を利用した枯山水の庭園である旧円融寺庭園等の歴史的な資源がまちなかに集積し、散策しながらその魅力を楽しむことができる。また、長崎街道沿いの松原宿にも歴史的な雰囲気の町並みが継承され、500 年の伝統のある松原刃物も受

け継がれている。そして、市内の至る所から大村湾の景色を眺めることができ、とりわけ夕日の美しさが印象に残っている。

上：玖島城跡（左）、オオムラザクラ（中）、草場小路武家屋敷通り（右）
下：大村藩お船蔵跡（左）、寺島（中）、旧円融寺庭園（右）

歴史と伝統が息づく松原宿の町並み

大村湾の景観

次は東彼杵町である。以前はハウステンボスや嬉野温泉、焼物の町である波佐見や有田に向かう通過点に過ぎないとされていたようであるが、ここ数年の間に若い人たちが集う小さな店がいくつもできている。筆者が最初に訪問したのが JR 大村線の千綿駅。ここは大村湾に面した駅で、「海に最も近い駅」として海や電車の撮影にやってくる人が後を絶たない。ホームから見える大村湾の絶景、築 90 年以上のノスタルジックな木造駅舎に加え、駅舎内に併設された千綿食堂の美味しいスパイスカレーも魅力である。

JR 千綿駅から見た大村湾（左）、JR 千綿駅と千綿食堂（中）、千綿食堂のスパイスカレー（右）

千綿駅から大村湾に沿って 10 分ほど北へ歩くと、東彼杵町の新たな拠点となりつつある「Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫」が見えてくる。以前は JA の米倉庫だったが、現在は地産のそのぎ茶を購入できる体験型のショップとカフェが併設されている。古い米倉庫をリノベーションした空間はおしゃれで心地よい空間を提供している。すぐ近くには、同様に古い建物をリノベーションしたアンティークショップやパン屋、フランス料理店等があり、エリア全体として魅力ある空間となっている。

千綿食堂を含めてこれらの施設に共通しているのは、I ターン者や U ターン者、地元の若手が「千綿を魅力ある地域にしたい」という想いで「まるごとエリアリノベーション」に取り組んでおり、わずか 5 年の間に約 20 店舗がオープンし、50 人近くが新規に移住しているとのことである。今後の展開が楽しみなエリアである。

Sorriso riso（ソリッソリッソ）千綿第三瀬戸米倉庫

アンティークショップ（左）、パン屋（中）、それらが立地する周辺環境（右）

以上、大村市と東彼杵町千綿駅周辺の魅力を一部紹介してきたが、大村湾沿岸の地域はそれぞれ歴史、自然、食等の多彩な魅力資源を有しており、広域的エリアで対比することでそれぞれの地域の魅力をより明確にすることができるのではないだろうか。特に、地域の個性が明確な長崎

市と佐世保市の中間に位置する諫早市や大村市、東彼杵町がその魅力をさらに高め、地域内外にPRすることで、大村湾沿岸の地域の一層の広域連携が可能になると思う。筆者は小さなまち旅を通して、「大村湾沿岸の地域は十域十色」というポテンシャルを持っていると感じている。

【多様なテーマから地域づくりのヒントを考える】

筆者は小さなまち旅を実践する中で、様々な魅力資源を発見してきた。地域性が明確な地域もあれば、都市化に埋没して地域の個性がわかりにくくなっている地域もあるが、そのような地域であっても、テーマを持って歩いてみると様々な魅力資源を発見することができる。

①風土、気候、地形等

地域の個性を形成する重要な要素の一つが風土、気候、地形等であり、これらに沿って各地域独自の生活が営まれ、固有の歴史や文化、町並みが形成されてきた。中でも印象に残るのが、2018年１月に訪問した尾道の風景である。尾道市のパンフレットを見ると「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市～ああ、この風景に会いたかったんだ。」と記されている。尾道水道と尾道三山の間の限られた空間に、多くの寺社や家々がひしめき、坂道と路地でつながる景色が「箱庭」に例えられてきており、懐かしい心象風景を思い起こさせてくれる。

尾道を象徴する景観（尾道市）

また、福山市鞆の浦の港町の風景も印象的である。鞆の浦は伝統的建造物群保存地区に選定された時の資料によると「万葉の時代より潮待ちの港として栄えた瀬戸内海の港町」と表現されており、地形的に良好な港の条件を備え、古来より海上交通の要衝として栄えた。現在も雁木、波止、常夜灯、船番所、焚場といった江戸時代の港湾施設がほぼ完全な形で残っている。そして、

街路や海岸線も 300 年前の姿をよく留めており、伝統的な町家や寺社、石垣等の石造物、港湾施設等が一体となって良好に残り、瀬戸内の港町としての歴史的風致をよく伝えている。

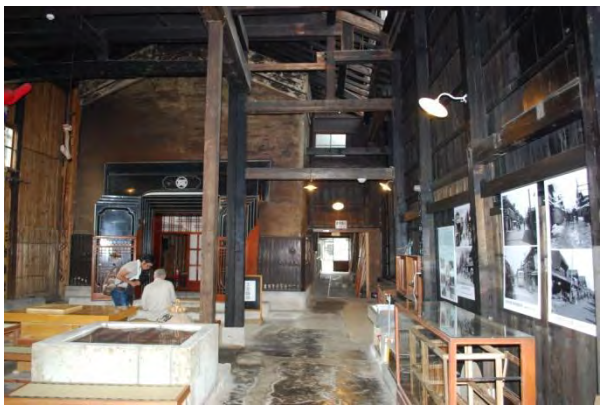
鞆の浦を象徴する景観（福山市）

②町並み景観、集落景観

もう少しブレイクダウンして町並み景観や集落景観という視点で見てみる。前述の風土、気候、地形等が町並み景観や集落景観に大きく影響するが、その中でも特に印象に残るのが、2013 年８月に訪問した横手市増田の町並みである（2017 年度の研究報告に記載）。

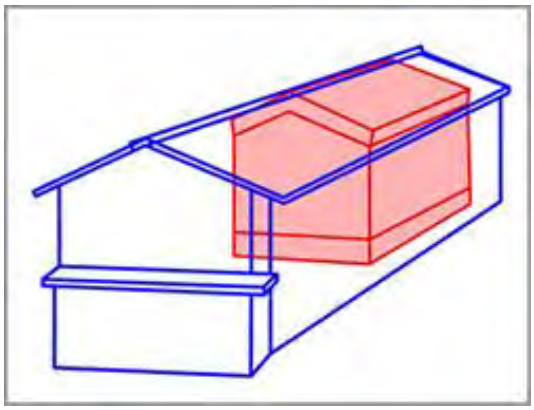
増田は江戸末期～昭和初期に、宮城県と秋田県を結ぶ交通の要所として発展し、葉タバコや蚕糸の生産等で商人文化が栄えた。特に明治時代になると、銀行事業や電力事業等の成功により商業活動が加速度的に活発化した。当時の商人たちが、成功の証しとして主屋の奥に蔵を造ったのが、「内蔵」の始まりとされている。内蔵は蔵を豪雪から守るため、全体を「鞘」と呼ばれる上屋建物ですっぽり覆った土蔵であるが、増田の内蔵は主屋の奥に建っており、道路からは見えず、ひっそりと佇んでいるのが特徴である。

町割りは間口が５～７間（９～12.6m）、奥行きが 50～100 間（90～180m）と極端な短冊型となっており、その上に町家建築が建ち並び、伝統的な町並みが形成されている。道路側からは、２階の正面に梁首と呼ばれる梁組を見せているのが特徴で、職人技術の粋を垣間見ることができる。明治前期から戦前にかけて建てられた短冊型の主屋が軒を連ねる景観は、当時の情緒を現在に留めており、主屋・内蔵・外蔵を「トオリ」と呼ばれる土間で結ぶ商家町家の特徴は、この地方独特のものとなっている。

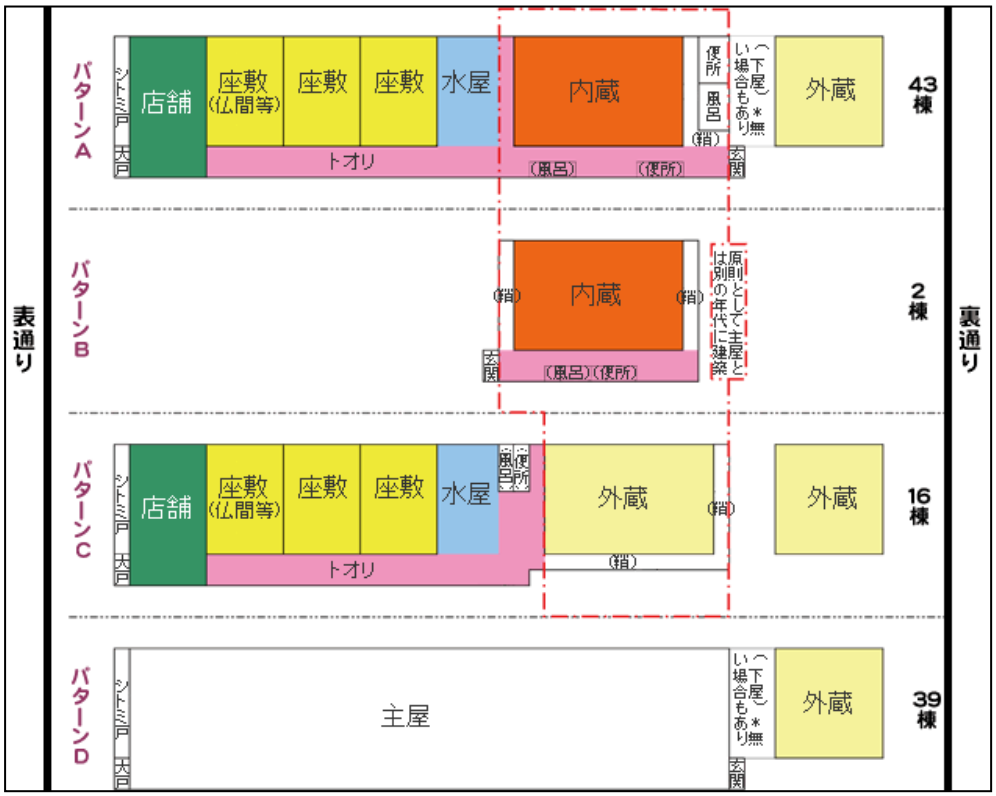


旧石平金物店（現在は増田町の観光案内所兼物産販売所「蔵の駅」）の内部（左）と内蔵（右）

蔵の駅の外観



内蔵の立地イメージ
（横手市 HP「奥ゆかしき商家の町並み　ますだ」より引用）



増田の土蔵のパターン（横手市 HP「奥ゆかしき商家の町並み　ますだ」より引用）

この他、伝統的な町並みを形成している地域を見ると、それぞれの地域の歴史や生活を反映しているものも見られる。長岡市谷内（やち）では豪雪地帯特有の雁木が続いており、冬季においても地域の生活活動や商業活動が営まれるよう「冬の生活道路」となっている。川越は何回もの大火の末に防火性を考慮して導入された土蔵づくりや重厚な開き窓、堅牢な瓦屋根が町並みの大きな特徴となっている。

八女福島では隣家との空間に半間ほどの屋根を架け、手前と奥で相互に利用しあう「もやい壁」の形式が見られ、細長い敷地を有効利用しているのも特徴である。有田のトンバイ塀は登窯の内壁に使われた耐火レンガの廃材や使い捨ての窯道具、陶片を赤土で固めた塀で、江戸時代から造られている。廃材を利用したリサイクルとしてだけでなく、陶工の技術の漏洩を防ぐ意味もあったとのことである。

長岡市 谷内（やち）の雁木の続く町並み（左）、川越市 川越の土蔵づくりの町並み（右）

八女市 八女福島のもやい壁のある町並み（左、中）、有田町 有田内山地区のトンバイ塀のある町並み（右）

③歴史的建造物

さらにブレイクダウンして歴史的建造物という視点で見てみる。まずは、煉瓦造りの建造物である。煉瓦造りの建造物は近代化とともに日本に導入され、教会堂等の文化財クラスだけでなく、注意深く見てみると、まちなかには幕末から明治の面影である煉瓦造りの建物や塀を発見することができる。なかには外観からは煉瓦造りの建物に見えないものもあったり、こんな場所にどうして煉瓦造りの塀の住宅地があるのかと思わぬ発見をすることもある。煉瓦の積み方が異なっているのも、見ていて楽しいものである。

大分市 大分銀行赤レンガ館（左）、唐津市 旧唐津銀行（右）

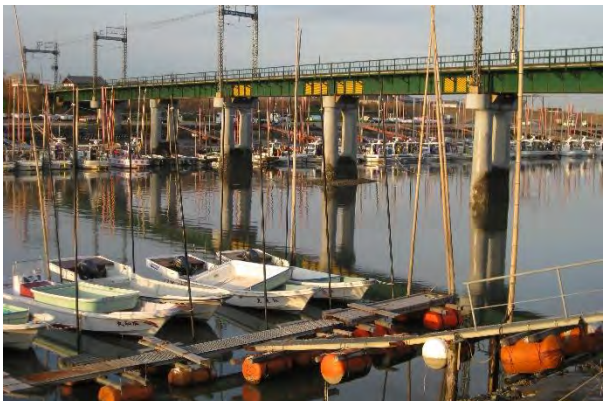
長崎市内で見かけた赤煉瓦造りの建物や塀：オランダ坂付近（左）、松森神社付近（右）

熊本市 防火壁の役割を果たしている町家の赤煉瓦の塀（左）、長崎市 煉瓦造りに見えない大浦天主堂（右）

須恵町旅石で見かけた赤煉瓦造りの塀が続く住宅地

また、石橋や鉄橋も地域の魅力資源の一つである。文化財クラスのものもあれば、身近なものもあり、いずれも懐かしい感じを与えてくれる。周辺の漁村景観や河川景観と一体となっているものもあれば、秘かに佇んでいるものもある。筆者はいろいろな場所を旅する中で、石橋の魅力に惹かれ、八代市東陽町種山にある石工の郷を訪ねたこともあるが、その匠の技術が種山から熊本県へ、そして九州各地、全国へと伝承し展開していることを考えると、様々なストーリーがあることがわかる。そうした視点で地域を訪ね歩くことも楽しいのではないだろうか。

長崎市　中島川に架かる眼鏡橋（左）、朝倉市秋月　野鳥川に架かる眼鏡橋（右）



柳川市～みやま市　西鉄中島駅付近の矢部川に架かる鉄橋（左）、熊本市　川尻付近の加勢川に架かる鉄橋（右）

八代市　石工の郷・種山の重見橋（左）、鍛冶屋下橋（右）

④樹木

歴史的資源に乏しい地域でも身近に存在するのが、街路樹やまちなかにある樹木である。美しい並木道を形成しているものもあれば、樹齢数百年で地域のシンボルとなっているものもある。都市開発が進む中で意識的に残されてきた樹木もあれば、被爆で生き残ったものもある。そうした一本一本の樹木には様々なストーリーがある。花の咲く頃や紅葉の時期だけでなく。そうした視点で樹木を見て歩くことも楽しいのではないだろうか。

諫早市 諫早神社のクス群（左）、筑前町 草場川の桜並木（右）

長崎市 山王神社の被爆クスノキ（左）、福岡市 赤坂の JT 跡地のイチョウ（右）

福岡市 筆者の自宅近くの身近な樹木：豊浜の枝垂れ梅（左）、愛宕浜のケヤキ並木（右）

（２）ヒト（人、組織）

【地域のまちづくりに求められる視点、まちづくり人に求められるもの】
・老若男女それぞれの視点
・ヨソモノ（地域外の人間）の視点
・まちづくり人に求められるのは、「地域への想い」「前向き思考」「包容力」「相手への配慮（リスペクト）」

【地域に根ざしたまちづくり組織】
・組織の使命（ミッション）
・地域資源の再認識と掘り起こし
・地域ブランドの構築（地域らしさ、情報発信、地域の共感）
・ドーパミンの出るまちづくり（チャレンジの連続と自省）
・巻き込み力

【地域内の各団体の連携による活動の広がり】
・各団体の垣根を越えた地域全体としての取り組み

【小さなまち旅のすすめ】
・ネット上だけではなく、実際に旅に出て自分の眼で実物を見て、都市や地域、建築を見る感覚を磨く。旅のテーマは地域の風景、町並み、建築、食、特産品など様々である。
・それぞれの地域の空気と背景（歴史、気候、成り立ち等）を知ることで、地域の個性を把握する。
・旅で得た体験や情報を自分の住む地域に置き換えて考えてみる。

【樹木や花から景観の美しさ、組織のあり方を考える】
・桜並木やイチョウ、ケヤキの紅葉のグラデーションに見る「多様性の中の統一」「組織運営（多様な個人と組織）」

【地域のまちづくりに求められる視点、まちづくり人に求められるもの】
【地域に根ざしたまちづくり組織】
【地域内の各団体の連携による活動の広がり】

これら３項目については、2017年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究」の第３章７－（２）（３）に詳しく記載しているので、省略させていただき、残りの２項目について筆者の考えを述べる。

【小さなまち旅のすすめ】

①「空間 時間 旅」の視点

筆者は本研究の「はじめに（研究の目的）」の冒頭に次のように述べており、時間をかけて様々な地域や場所に移動し、様々な空間を体験することで、地域づくりのヒントを吸収している。

『インターネットの発達した現在においては、その地域や場所に行かなくてもいろいろな情報を入手できるが、時間をかけてその地域や場所に行く移動の過程でいろいろなことを想像し、思考を深めることができる。また、実物を見て空間を体験し地域の方々と対話することで、新たな考えが生まれ、地域づくりのヒントを得ることができる。近代建築の教科書と呼ばれる「空間 時

間 建築」（ジークフリード・ギーディオン著）のタイトルを引用するわけではないが、情報化時代の地域づくりにおいてこそ「空間 時間 旅」の視点が求められているのではないだろうか。』

②小さなまち旅

繰り返しになるが、「小さなまち旅」は筆者が熊本地震をきっかけに始めた２つの旅「地域づくりや建築の原点に返る旅」と「熊本の復興の過程を巡る旅」を総称したものとして使っている。その後、「身近なまち旅」を加え現在に至るが、学生時代から実践している「現代建築を巡る旅（1976 学生時代～）」「歴史的建造物と町並みを巡る旅（1980 会社員時代～）」「景観づくりと地域づくりを巡る旅（1986 公務員時代～）」も小さなまち旅の一環として改めて整理している。

前にも述べたが、筆者が小さなまち旅を進める背景には、全国どこに行っても同じような街並みの形成とそれに伴う地域の個性の喪失という強い懸念がある。地域づくりに携わる者は、インターネット上だけでなく、実際に旅に出て自分の眼で実物を見て、都市や地域、建築を見る感覚を磨くことが必要である。それぞれの地域の空気と背景（歴史、気候、成り立ち等）を知ることで、地域の個性を把握できる。第１章の２で紹介したが、旅のテーマは地域の風景、町並み、建築、食、特産品、人や絵画との出会いなど様々である。何か感じ取ることができれば、それで十分なのである。

そうして得た体験や情報については、まずは肯定的にも否定的にも受け入れ、自分の住む地域に置き換えて考えてみることが重要である。そこにはいろいろな地域づくりのヒントが広がっているのである。

筆者の小さなまち旅のテーマは、風景、町並み、建築、身近な空間まで様々である。

【樹木や花から景観の美しさ、組織のあり方を考える】

①桜並木

筆者は桜の花が好きで、春になるといろいろな桜を見に行くようにしている。桜の名所になっている場所もあれば、自宅近くの身近な桜もある。南阿蘇村の一心行の桜のように一本で桜の名所になっているものもあれば、一本一本の樹木の存在感は薄くても、並木になれば存在感を放つものもある。筆者は並木を構成する桜から美しさだけでなく、組織のあり方を感じている。

例えは、熊本市健軍の自衛隊通りの桜や朝倉市秋月の杉の馬場の桜は、一本一本の形は決して綺麗ではないが、よく見ると、人の人生と同じようにこれまでの桜の歴史を感じ取ることができる。それは、人の生き様と同様に桜の生き様である。

また、一本一本の桜の幹や枝の形は様々であるが、それが並木となると美しい景観を形成する。それは、「多様性の中の統一」という表現がピッタリであり、異なる性格や考え方等を持つ多様な個人により構成される人間社会のあり方をも考えさせるものだと感じている。これは職場や学校、地域団体等の様々な組織において、応用できるのではないだろうか。

熊本市 健軍の自衛隊通りの桜並木

朝倉市 秋月の杉の馬場の桜並木

②イチョウ、ケヤキの紅葉

紅葉の名所だけでなく、毎年 11 月になると、筆者の自宅近くのイチョウ並木やケヤキ並木も紅葉し、紅葉の具合により様々な色のグラデーションを感じることができる。これらの紅葉からも「多様性の中の統一」「組織運営（多様な個人と組織）」を感じることができるのである。

福岡市　筆者の自宅近くのイチョウと桜の紅葉のグラデーション（愛宕浜）

福岡市　筆者の自宅近くのケヤキの紅葉のグラデーション（愛宕浜）

③花

「一人一花運動」という言葉は、「市民主体の花のまちづくり」の一環として福岡市が 2018 年から推進しているので、福岡市民にとってはよく耳にする言葉である。筆者は 2018 年 12 月に大分市アートプラザを訪問した際、障がいのある方々が制作した作品の展示会を見る機会があり、その時の「ひとり一人の花を咲かせよう」という言葉が大変印象に残っている。それは、異なる環境にあるすべての人々の生き方が尊重される社会の実現を意味している。

大分市　障がいのある方々が制作した作品の展示会（大分市アートプラザ）

花をよく見ると同じ種類の花でも同じものは一つもなく、異なる個が集積して魅力ある花畑や樹木、並木を形成していることがわかる。それは、人間社会の「個と組織」の関係と類似している（異なる個の集積が魅力ある組織を形成する）。「一人一花」は花の世界だけでなく、人間の世界でも当てはまり、組織のあり方を考える上で参考になるのである。そうした視点で花を見て回ることも楽しいものである。

人間社会も身近な自然界から学ぶことがたくさんあるのではないだろうか。桜や紅葉、花の事例は、ほんの一例に過ぎないのであり、参考になる事例は身近に多く存在するのである。

長崎市　紫陽花（左：出島、右：眼鏡橋付近）

福岡市　能古島アイランドパークのコスモス畑

（３）コト（ストーリー）

「コト（ストーリー)」は、前述までの「モノ（地域資源)」を「ヒト（人、組織)」が活用することで成り立つもので、せっかくの素材があっても有効に活用する者がいなければ、宝の持ち腐れとなってしまう。数式として表現するのは難しいが、地域づくりで成果を上げている地域では『モノ（地域資源）×ヒト（人、組織）＝コト（ストーリー)』という感じであろうか。しかし、多くの地域ではポテンシャルを有していながら「モノ」が活かされずに埋もれている地域が多いと筆者は感じている。

筆者の地域づくりのベースにある考え方は『今あるモノを活かすことが大事。新しいモノは要らない。』ということであり、地域にある身近な宝を探求し、しっかり活用していくことにもっと目を向けるべきである。

【各地域のそれぞれの魅力資源を活かしたまちづくり】

・地域の風土・歴史・文化の尊重

・各地域の風土・歴史・文化を活かした町並みの維持継承

・身近な魅力資源を活かしたまちづくり

【場所性や地域固有の材料を活かした建築と地域づくり】

・場所性（空間特性)、地域に昔から存在する材料へのこだわりが、その場所ならではの建築や地域づくりにつながる。

【まちづくりの課題や段階（ステージ）に対応した取り組み】

・各段階の地域課題⇒目標設定⇒活動の推進⇒振り返り
⇒新たな課題や動向への対応⇒新たな目標設定⇒活動の推進⇒振り返り

※この好循環の繰り返し

【広域連携による地域づくり】

・地域の個性が見えにくくなっている中で、広域的空間の中での対比によって地域の個性を浮き彫りにする（輝かせる)。

・広域連携により、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、地域全体としての魅力も高める。

【点・線・面による地域づくりがもたらす地域のアイデンティティ】

・魅力ある点（施設、空間等）を増やすことで線（沿道空間等）となり、さらに増やすことで面（個性ある地域）となる。魅力ある点の集積が線となり、面となり、地域全体の魅力を増進させ、地域のアイデンティティとなる。

【各地域のそれぞれの魅力資源を活かしたまちづくり】

【まちづくりの課題や段階（ステージ）に対応した取り組み】

この２項目については、筆者は2017年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究」の第３章７－（１）（４）に詳しく記載しているので、省略させていただき、残りの３項目について筆者の考えを述べる。主に「モノ×ヒト＝コト」という視点で展開していきたい。

【場所性や地域固有の材料を活かした建築と地域づくり】

筆者は建築に携わる者として、まずは場所性や空間特性にこだわりたい。設計を進める上でいろいろな制約はあるが、この場所でしかできないことは何なのかというこだわりが重要である。場所の持つ特性を読み取り、地域の中でどういう役割が期待できるのか、特に公共性の高い建築については地域課題（回遊性の強化、商店街の活性化等）への対応という大きな視点の中で考えていく必要がある。

例えば、隈研吾氏設計の長岡市のシティホールプラザ アオーレ長岡では、「ナカドマ」と呼ばれる開放感あふれる屋根付き広場が設けられ、地域の新しい核となる複合型の市役所となっている。ナカドマは、日本建築の土間の概念を取り入れ、市民が誰でも気軽に立ち寄ることができ、雨や雪の日でもイベントができる屋根付きの大空間であり、雪国ならではの空間となっている。筆者が訪問した時にも様々なイベントが行われており、多くの市民で賑わいを見せていた。

また、同氏設計となる富岡市役所は、上州富岡駅と富岡製紙場へ向かう経路上にあるという立地を活かして計画されており、分棟型で棟と棟の間を通り抜けできるストリート型の公共建築となっており、回遊性の強化が意図されていると感じた。市役所に隣接する富岡倉庫群では、繭等の保管倉庫から店舗等への改修プロジェクトも進行しており、富岡駅周辺の交流拠点づくりと地域の活性化が図られている。富岡駅～富岡製糸場の回遊性の強化につながっていくと思う。

長岡市 シティホールプラザ アオーレ長岡

富岡市 上州富岡駅（上）と富岡製糸場（下）へ向かう経路上にある立地を活かして計画された富岡市役所（右）

富岡市 改修プロジェクトが進む富岡倉庫群（2019 年1月）。現在は、店舗や世界遺産センター等が入居している。

次に、全国的に画一化した街並み形成が進む中で、各地域固有の気候や地形、風土、文化等から生まれた空間や材料を改めて見直していくことも必要である。その典型的なものがそれぞれの地域の風土に培われた暮らしの産物である民家であろう。

例えば、町並み修景事業の成功例として全国的に知られる長野県小布施町では、翛然楼（ゆうぜんろう）周辺町並み修景事業において、江戸時代からの高い文化性を伝承したこの地域固有の建築景観（蚕室や納屋、長屋門等は小布施をはじめ北信濃地域の先人たちの営みの積み重ねを物語っている）を活用する形で行われ、その後に周辺に展開することになるまちづくりのイメージを具体的に提示することになった。

小布施町 翛然楼周辺町並み修景事業

小布施町に見られる固有の建築景観

また、隈研吾氏設計の由布市のCOMICO ART MUSEUM YUFUINは、由布院の景観に溶け込みながらも個性と存在感を漂わせている。遠くから見ると漆黒に見える焼杉の外壁は、周囲の景色をくっきりと浮き上がらせて、その価値を引き立てているが、近寄って見ると木の温もりや風情を感じさせる。分節された小さな屋根の連なりは、小さな家々が集まって成り立つ由布院の景観と調和して、一体化しながら個性を漂わせている。

由布市 COMICO ART MUSEUM YUFUIN

まちづくりの規制やルールが有る無しに関わらず、各地域固有の風土から生まれた空間や材料を尊重し、現代の空間の中に活かしていくことが地域特性を活かしたまちづくりにつながっていくのである。

【広域連携による地域づくり】

「広域的な視点から探る地域の魅力」については、「モノ（地域資源）」の項で松浦鉄道沿線や大村湾沿岸の市町について筆者が小さなまち旅で感じた魅力を紹介してきたが、それぞれのエリアで自治体等が中心となって広域連携の取り組みを進めているので、今後の展開に期待したい。

さて、筆者は前述のように福岡都市科学研究所（現(公財)福岡アジア都市研究所）時代の 2001～2002 年度に「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」に携わり、事務局として「魅力ある地域づくりと広域連携」について自ら執筆した（繰り返しになるが、次ページに再掲する）。20 年経った今でもこの考え方は全く変わらない。コロナ禍の中では、筆者にとってはこ

の考え方がさらに強くなり、身近な地域づくりを進める上で「地域の個性が見えにくくなっている中で、広域的空間の中での対比によって地域の個性を浮き彫りにする（輝かせる）こと」や「広域連携により、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、地域全体としての魅力も高めること」の重要性を痛感している。これは、県域や市町村域を超える広いエリアでの連携だけでなく、隣接する区や校区といった狭いエリアでの連携も該当する。

「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」の中での
「事例にみる広域連携の意義と効果」より、筆者の地域づくりの考え方を示すものを抜粋

【魅力ある地域づくりと広域連携】

■広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

・広域連携のベースにあるのは、それぞれの地域の資源（自然、歴史・文化、産業、人材等）を活かした地域づくりであり、広域連携は個性ある地域づくりの延長である。

■経済や人口規模の大小だけが都市の豊かさの指標ではない。真の豊かさとは、魅力ある地域づくりがもたらす人々の地域に対する誇りである。

・人を惹きつけるのは、都市規模（経済や人口規模）の大小ではなく、地域固有の資源を活かしたまちづくりである。今後は、「心の豊かさ」「文化の豊かさ」「環境の豊かさ」「景観の豊かさ」「人との関係の豊かさ」等が都市の豊かさの重要な指標となる。

・都市の豊かさとは、「真に魅力ある地域づくりがもたらす、人々の地域に対する誇り」である。

■交流人口（交流のまちづくり、観光のまちづくり）による地域の活性化

・人口減少社会において定住人口を増やすことは難しく、地域外からの来訪者（交流人口）をいかに増やしていくかが地域活性化の大きな課題である。そこでは、経済効果だけでなく、情報・文化の交流効果が求められている。

・今後は、従来の物見遊山的観光やテーマパーク型観光ではなく、個性豊かな町並みと地域づくりを体験する旅や、農山村の魅力（自然、食、人等）を体験するグリーンツーリズム等、地域社会（住民）、地域の資源、来訪者の三者がうまく調和した「観光まちづくり」という視点が重要になる。

・中心市街地を活性化するには、商業だけの魅力では限界があり、地域の歴史・文化資源のまちづくりへの活用、情報・文化の交流、そして楽しく歩いてもらえる歩行者優先の道路づくり等の視点を取り入れた「観光まちづくり」への転換が求められている。

■地域づくりの情報発信

・地域づくりで成功している市町村に共通することは、地域づくりや情報発信、交流の拠点となる組織や施設がしっかりしている。

・面白い地域づくりを展開している市町村には、地域の歴史・文化、特産品、まちづくり等の情報をわかりやすく発信する読み物としての「地域づくり読本」がある。地域づくり読本は、訪れる人が地域を知るうえで大変役に立つ編集・構成になっていると同時に、地域の人々が地域の資源を再確認することで、地域に対する誇りや愛着を創出するという効果もある。

ここで筆者が魅力的だと感じている長野県小布施町を中心とした北信濃地域の広域連携の取り組みを紹介する。なお、小布施町の地域づくりについては、2017 年度の「身近な地域資源を活かしたまちづくりの実践方策に関する研究」の第２章５－(１)に詳しく記載している。

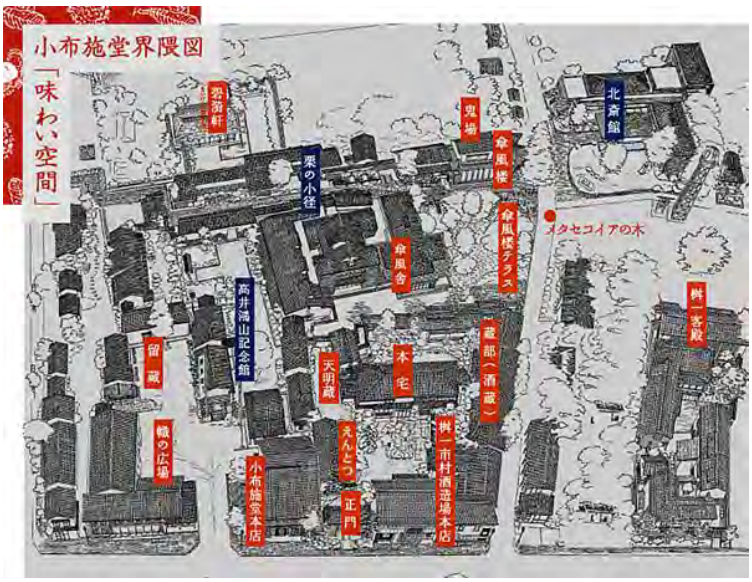
北斎館に端を発した小布施の地域づくり＆北信濃地域への展開

（「福岡大都市圏における広域連携のあり方に関する研究」より筆者執筆部分を時点修正）

小布施の地域づくりは、「こだわり」「もてなし」「歴史・文化」「地域への愛着・誇り」「暮らしやすさ」「地域資源の発掘・活用」「身の丈に合ったまちづくり」「地域づくりは人づくり」等の成功のための多くのキーワードを提供している。そこには、時代の波に左右されないまさしく本物志向のまちづくりが展開されている。

小布施のまちづくりを象徴するものとして、「外はみんなのもの、内は自分のもの」という言葉があり、小布施人が町並み修景を語る時によく使う言葉である。小布施の場合は、まず生活する人々の快適な暮らしを優先し、その上で町並みに調和した外観づくりを工夫している。これは、「住む人が快適に思わない町は、来訪者にとってもきっと居心地の悪い場所に違いない」という小布施流のまちづくりの理念が貫かれているからであり、日々の魅力的な生活文化や暮らしぶり＝「美日常」を大切にしたまちづくりを強く志向する姿勢がうかがえる。観光地化を目指したまちづくりとは対極的に、きちんと足元を見つめた本物志向のまちづくりが長期的に持続する秘訣といえるのではないだろうか。

1965 年代（昭和 40 年代）はりんごを中心とする農業と栗菓子産業の他はこれといった産業もない、ありふれた町であったが、「葛飾北斎」という小布施ゆかりの人物をきっかけに（北斎館の開館）、「町並み修景」や「花のまちづくり」を進めるなど、暮らしやすく面白いまちづくりを展開し、多くの人が訪れる町になった。



小布施堂界隈町並み修景鳥観図（左）と小布施の魅力やまちづくりを紹介した「遊学する小布施」（右）

こうした小布施のまちづくりは、町内にとどまらず、須坂市、長野市（善光寺周辺、松代等）へも波及し、「歴史的な環境を活かしたまちづくり」「文化・芸術を中心にしたまちづくり」をベースに「地域づくり」「町並み」「食文化」「情報発信・交流拠点」等、テーマ性を持った広域ツーリズムへと展開を見せている。次ページにその一例を紹介する。

北信濃広域ツーリズムメニューの一例

■見る（個性豊かな町並みと地域づくりを体験する）

小布施町に隣接する須坂市は、江戸時代は須坂藩の城下町として、また、明治から昭和にかけては製糸の町として繁栄してきた。現在も、まちの随所に当時の面影を残す土蔵造りや大壁造りの商家や民家等が見られ、それらを活かした町並み修景事業を展開している。

長野市の善光寺は、年間 600 万人もの人が訪れる我が国有数の観光地であるが、JR 長野駅から善光寺に至る約２㎞の中央通りには、蕎麦、おやき、味噌、酒饅頭等を扱う老舗の商店が軒を連ねており、歴史的な雰囲気を感じさせる建築物も数多く残っている。これらの中には、店の一部を改修してガラス博物館、絵画工芸博物館、消防博物館等の「まちかどミニ博物館」として公開しているものもあり、善光寺七福神巡りや長野県信濃美術館・東山魁夷館等とあわせて楽しむことができる。

また、長野市南部にある城下町・松代は、1622 年（元和８年）に徳川幕府の命により、真田信之が上田城から移封になって以降、明治維新に至るまで真田氏 10 代、約 250 年間にわたって質実剛健な武家文化を育ててきた。ここには、往時の風情を残す武家屋敷、真田氏ゆかりの由緒ある寺院や庭園等が点在し、江戸の昔さながらの魅力的な歴史散策を楽しめる。信州松代まるごと博物館構想（2001 年策定）に基づき、「城下町らしさを演出する町並みの形成」「歴史と文化を活かした観光商業の振興」「来訪者を迎え入れる“もてなしの心”の醸成」「人にやさしい交通環境の整備」を目標に各種の事業が展開されている。

須坂市 須坂の町並み（左）、長野市 中央通りの町並み（右）

長野市 松代の町並み

■学ぶ（地域文化に触れる）

これらの四つの地域（小布施町、須坂市、長野市善光寺周辺、長野市松代）には、文化・芸術を学べるアーティスティックな施設が大変充実している。各地域とも多彩な文化人を輩出しており、そうしたゆかりの人物に焦点を当てた施設が多いのが特徴である。小布施には「北斎館」「高井鴻山記念館」「おぶせミュージアム・中島千波館」、須坂には「須坂版画美術館」「須坂クラシック美術館」、善光寺周辺には「長野県信濃美術館・東山魁夷館」、松代には「池田満寿夫美術館」、また、少し須坂寄りになるが「北野美術館」等がある。小布施の北斎館に端を発した「文化・芸術を中心にしたまちづくり」は、文化地帯として次第に広がっている。

小布施町　北斎館（左）と高井鴻山記念館（右）

■味わう（地域の食文化を味わう）

「見る」「学ぶ」ときたら、次は「味わう」である。恵まれた自然環境の中で、いずれの地域も豊かな食文化を育んできており、伝統的な郷土食も継承されている。小布施では特産品の栗を使った「栗おこわ」や「栗菓子」、須坂では「紫おこわ（紫米と呼ばれる古代米を使っている）」、長野では「善光寺の精進料理」や「松代の長芋料理」、そして北信濃に共通するものとして「蕎麦」「おやき」等が代表的な料理として挙げられる。また、特産品のりんごやぶどうを使った「ジュース」「ワイン」が美味しいのはいうまでもない。日本酒も美味しく、小布施の「桝一市村酒造場」や長野の「西之門よしのや」、須坂の「遠藤酒造場」等は、江戸時代からの伝統を誇っている。

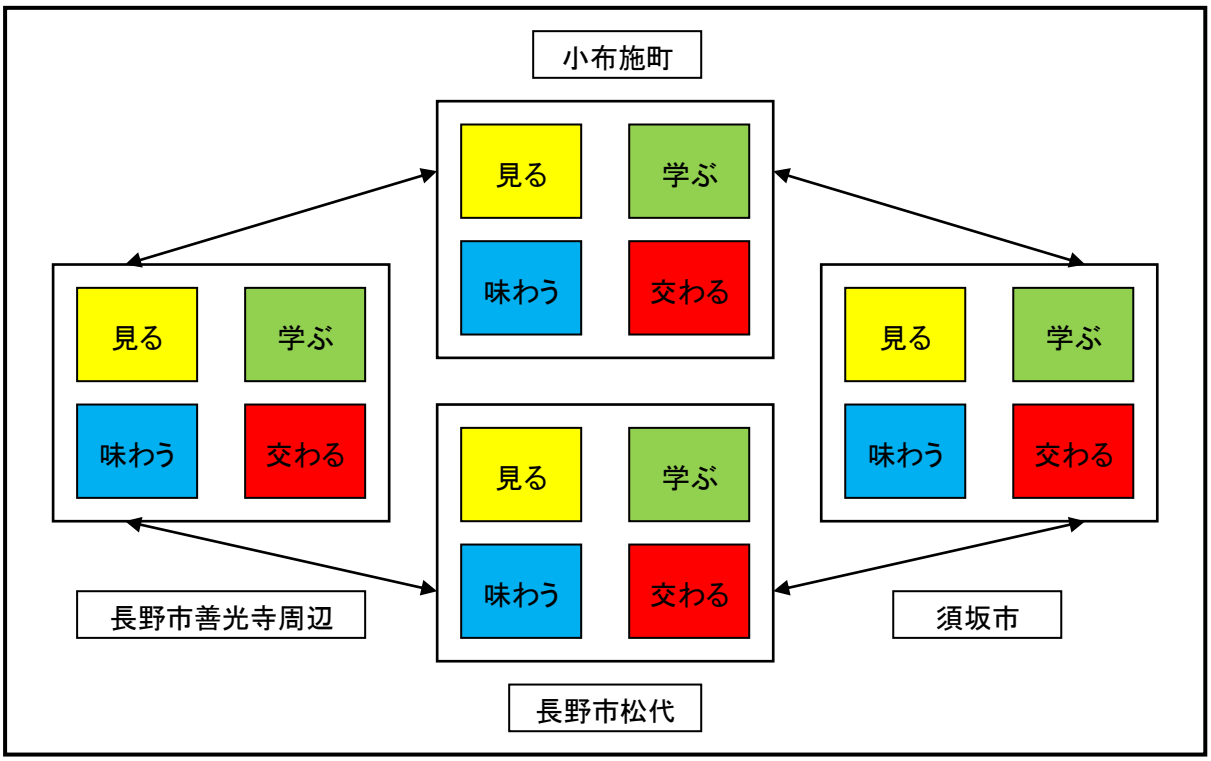
小布施町　小布施堂の栗菓子（左・中、小布施堂 HP より）

小布施町　桝一市村酒造場の日本酒（右、信州小布施観光情報 HP より）

■交わる（地域と交流する）

最後は「交わる」である。それぞれの地域に着いたら、まずはまちづくりの情報発信拠点や交流拠点となっている施設を訪ねることを勧める。小布施では「ア・ラ・小布施」、須坂では「信州須坂町並みの会」、松代では「NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会」等がその役割を担っている。また、宿泊施設については、長野市やその周辺の由緒ある温泉地（野沢温泉、湯田中渋温泉郷、信州温泉郷等）に収容人数の多い大規模なホテルや旅館は数多くあるが、地域の方々と交流するには、小布施の「ゲストハウス小布施」のように情報や文化の交流が期待できる規模の小さな心のこもったプチ・ホテルや民宿がふさわしいと思う。

小布施町 ア･ラ･小布施（左）、長野市松代 NPO 法人夢空間松代のまちと心を育てる会の会員による案内（右）

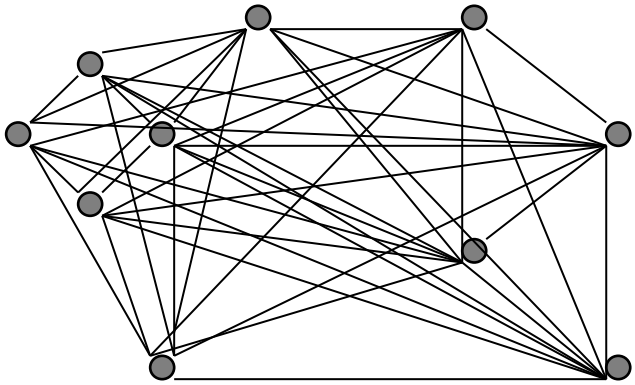


北信濃地域の連携イメージ
地域間連携やテーマ型連携等、市民や来訪者のニーズに対応した多彩な連携が可能である。

北信濃の各地域は現在では、それぞれ明確な個性を有しており、広域的空間の中での対比によって地域の個性がより浮き彫りになっている。また、広域的なエリアで連携することにより、それぞれの地域の個性をさらに増進させ、北信濃地域全体としての魅力も高めることに成功している好事例でないかと思う。小布施の北斎館から始まった地域づくりは、北信濃地域全体へと広がりを見せており、アイデンティティが確立されている。

【点・線・面による地域づくりがもたらす地域のアイデンティティ】

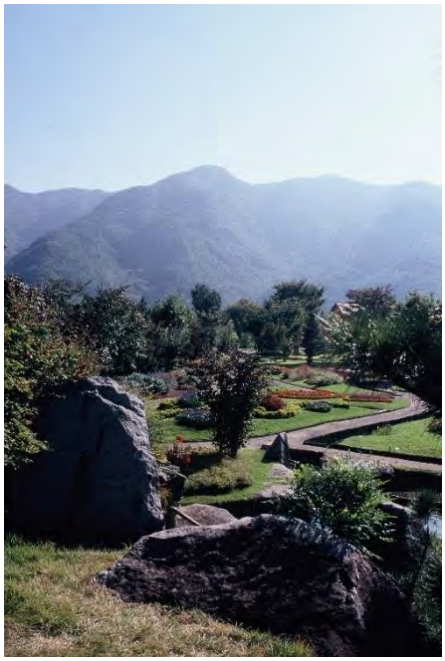
魅力ある施設や空間は単体（点）として各地に存在するが、それを結ぶ魅力ある施設や空間が増えれば、線になる可能性がある。線は商店街や道路、路地、河川や鉄道等が考えられる。さらに魅力ある施設や空間が増えれば、線がどんどん増えていくことになり、面となっていくのである。こうしてできた面が個性ある地域であり、地域のアイデンティティとなっていくのである。



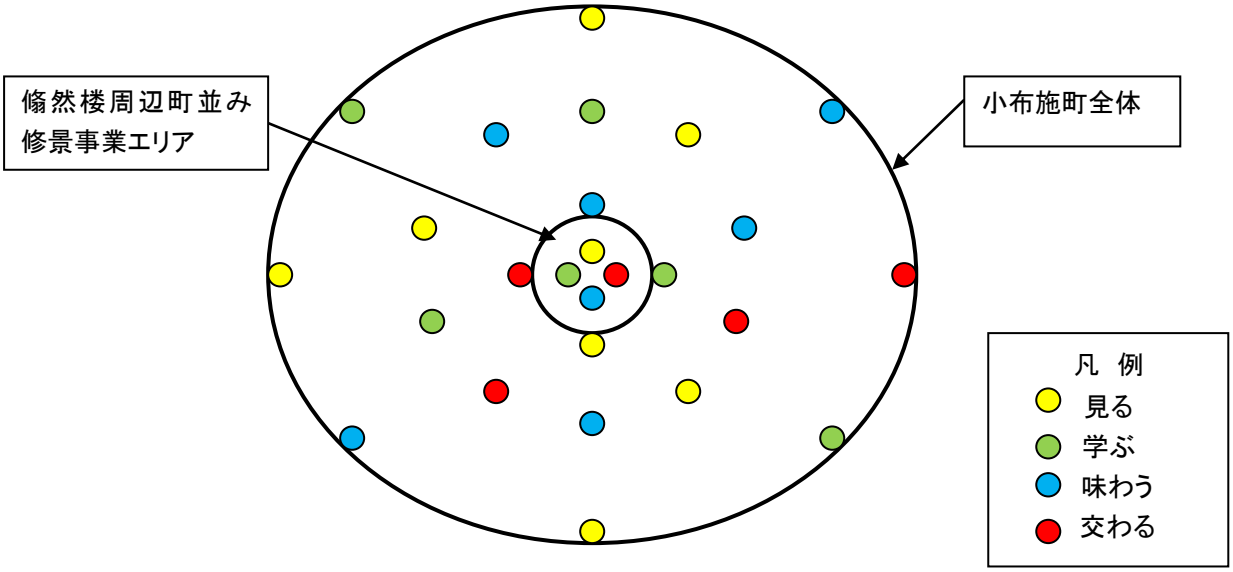
筆者が考える地域づくりの点・線・面の展開イメージ

具体的な事例としては、先に紹介した小布施町が考えられる。当初はまちの中心部の約1.6haの範囲がまちづくりの対象であったが（翛然楼（ゆうぜんろう）周辺町並み修景事業）、元々あった自然資源や歴史資源、文化資源、食資源等を連携させながら有効に活用することで、魅力あるまちづくりが次第に町内全体に広がり、半径約２㎞全体で地域固有の資源を活かした面白い地域づくりが展開されている。りんごや栗といった特産品以外に、何もない町から出発した小布施町であるが、「北斎」という小布施ゆかりの人物をきっかけに「町並み修景」「花のまちづくり」を進めるなど、暮らしやすく面白いまちづくりを展開し、多くの人が訪れる町になった。

小布施の場合は、翛然楼周辺の小さな面が大きな点となり、周辺の魅力資源と複数の線としてつながり、それが次第に大きな面となり、地域全体の魅力を増進させ、地域のアイデンティティとなった好事例である。



小布施町 フローラルガーデンおぶせから雁田山を望む



小布施町の地域づくりの点・線・面の展開イメージ

以下に筆者がこれまでに撮影した小布施町の多彩な魅力資源の一部を紹介する（これまでに掲載したものは除く）。

修然楼周辺町並み修景事業で生まれたオープンスペース

賑わいのあるまちの中心部

歴史のある寺院

信仰のある風景

松尾芭蕉の句碑

店舗の暖簾やサイン

まちのそこかしこで展開される花のまちづくり

花のまちづくりの拠点であるフローラルガーデンおぶせ

小布施のおもてなしのまちづくりの象徴でもあるオープンガーデン。約 130 箇所の個人庭園が公開されている。

【参考】小布施町のまちづくりの経緯（1976 年の北斎館開館～2000 年頃）

	地域住民や団体の動き	行政の動き	
		景観形成を中心とした動き	その他関連事項 （花のまちづくり等）
北斎館開館	1976 来訪者の増加 ← ↓ 地域に対する住民の誇りの創出	1965 頃 人口過疎化問題→長野市のベッドタウン化の動き ↓ 1970 頃 北斎に着目、北斎館建設へ 1976 北斎館開館	
町並み修景事業と波及効果	1982 翛然楼周辺の町並み ← 整備について提案。 修景を柱とするまちづくり 計画策定（～1984） ↓	1981 第二次総合計画策定。 北斎館・翛然楼周辺地区を「歴史文化ゾーン」に位置付ける。 1982 高井鴻山隠宅「翛然楼」を譲り受け、記念館建設へ 1983 高井鴻山記念館開館	1980 28 自治会に「町を美しくする事業推進委員会」を結成。花のまちづくり始まる。
	1984 翛然楼周辺町並み修景事業（～1987） 以降、1992 年までレストラン等の整備が行われ、現在に至る。		
	↓ 住民のまちづくりへの 参加意識の高揚 ↓ 景観形成活動の展開 修景事業の周辺への展開 ↓ 1991 小布施景観研究会発足	1986 総合計画後期基本計画策定 環境デザイン協力基準の骨子作成 ← うるおいのあるまちづくり優良公共団体として「自治大臣賞」受賞 1988 地域住宅計画（HOPE 計画）策定 環境デザイン協力基準の具体化 1989 住まいづくり相談所の開設 1990 うるおいのある美しいまちづくり条例制定。まちづくり貢献者表彰制度や助成制度を盛り込む。 1991 第三次総合計画策定 1992 住まいづくりマニュアル作成 広告物設置マニュアル作成	1989 ヨーロッパ花のまちづくり町民海外研修開始（～1992） 1992 フローラルガーデンおぶせ開設
新たな展開へ	1993 (株)ア・ラ・小布施（第3セクター）設立		
	↓ 1995 栗どっこ市始まる。 （ア・ラ・小布施） 1997 ゲストハウス小布施開館 （ア・ラ・小布施）	1994 「都市景観 100 選建設大臣賞」受賞 1997 あかりづくりマニュアル作成 2001 第四次総合計画策定	1994 花のあるまちづくりコンクール「農林水産大臣賞最優秀賞」受賞 1996 シャトルバス「おぶせ浪漫号」運行開始 1997 おぶせフラワーセンター開設 1998 「緑化推進功労内閣総理大臣賞」受賞 第3回国際北斎会議を小布施町で開催 中学生ヨーロッパまちづくり視察研修開始 2000 小布施オープンガーデン開設 小布施国際音楽祭開始

（小布施町提供の資料、パンフレット等をもとに筆者作成）

３　熊本の復興の過程を巡る旅から得たモノ・ヒト・コト

【復興のシンボル熊本城：前向き思考、縁、人】

筆者は熊本地震後の熊本の現状と復興の過程をしっかり目に焼き付けておくため、熊本城、新町・古町、阿蘇神社、阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町等を定期的に訪問している。

この中でも特に訪問回数が多いのが熊本城である。筆者が熊本地震後に最初に訪問したのが地震から２ヶ月後の 2016 年６月 18 日。お城全体が甚大な被害を受けたが、その中でも強く印象に残っているのが「飯田丸五階櫓の一本足の石垣」と「戌亥櫓の一本足の石垣」である。二つの櫓とも周囲の石垣が大きく崩れ、今にも崩れ落ちそうな状態でコーナーの石垣一本で辛うじて櫓を支えているだけであるが、この懸命な姿を見て多くの人々が感動し、勇気をもらったことだろう（奇跡の一本石垣で知られる飯田丸五階櫓については櫓倒壊防止のため、崩落石材回収工事を経て櫓を移設）。

熊本城 飯田丸五階櫓（左）、戌亥櫓（右）

その後も進捗の節目や特別公開の時期であったり、桜や紅葉の時期であったりと 2016 年６月～2021 年３月までの訪問回数は 25 回に及ぶ。復興の状況は新聞やテレビでよく報道されており、筆者もできるだけそのタイミングで見に行くようにしている。恒例になっているのが、桜の満開の時期の訪問であり地震前の 2015 年から続けている（残念ながら 2020 年はコロナ禍の影響で自粛）。石垣の被害は甚大なものであるが、それでも石垣と桜の美しさは見事であり、多くの市民や観光客が訪れ、賑わいを見せている。どんなに傷ついていても熊本城は市民にとって常に熊本のシンボルであり、誇りなのである。

桜が満開の頃の熊本城

特筆すべきことは、熊本市が約 20 年にわたる復興の過程を市民の目に見えるようにしていることである。進捗状況を定期的にマスコミに公開することで新聞やテレビで報道され、県内外から多くの人々が訪れている。特別公開も段階的に行われ（これまで第１弾～第２弾）、熊本市の職員、ボランティアの方々、警備の方々が精一杯のおもてなしをしてくれる。ホームページや現地でのガイダンスも充実しており、進捗の過程がよくわかるようになっている。「熊本地震というピンチ」を「復興の過程を市民に見ていただくチャンス」と捉えた前向き思考の考え方は素晴らしいと思う。

第１弾特別公開の様子（2019年10月）

第２弾特別公開の様子（2020年６月）

2021 年４月 26 日からは第３弾特別公開が予定されており、震災から５年の大きな節目に完全復旧した天守閣の内部も見学することができる。筆者も震災復興のシンボルである天守閣の公開をとても楽しみにしている。唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業と同時にスタートした筆者の「熊本の復興の過程を巡る旅」も一つの節目を迎えるが、今後も熊本城の復興の歩みと自分自身を重ね合わせながら定期的に訪問していきたい。

第３弾特別公開に向けて復興工事が進められている天守閣（2020 年 11 月）

また、熊本城を 25 回も訪れているといろいろな光景に出会う。熊本地震から 1 年程経った 2017 年 5 月の訪問時には、城内の加藤神社で復興工事の様子をバックに結婚式の記念撮影が行われていたが、新郎新婦も今後の人生を熊本城とともに歩んでいくのだと思い、筆者もカメラのシャッターを切っていた。今でも印象に残る光景である。

2018 年 4 月の「天守閣の鯱設置イベント」の際には、唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代に取材や記事掲載等で大変お世話になった西日本新聞社の濱口妙華記者にも再会し、久し振りの会話を楽しむことができた。濱口記者は当時、益城町を担当されており、復興の状況も聞くことができた。姪浜を離れた二人が熊本城で思いがけない再会を果たすのも、筆者の姪浜でのまちづくり活動がもたらした縁なのであろうか。「縁を大事にする」ことも小さなまち旅で改めて学んだことである。

天守閣再建に向けて一部解体工事が始められた熊本城をバックに結婚式の記念撮影（左、2017 年5月）
姪浜のまちづくり活動でお世話になった新聞記者と再会した天守閣の鯱設置イベント（右、2018 年4月）

【町家の再生：大地震を乗り越え、脈々と受け継がれる文化都市・熊本】

2017 年 5 月 26 日の朝日新聞によると、熊本都心部の新町・古町では、地震前は 343 棟の町家があったが、そのうち 282 棟が損壊した。熊本地震後に筆者が最初に新町・古町を訪問したのが 2016 年 12 月。その時には既に解体が進み更地が目立っていたが、その一方、改修に着手したものもあれば、傾いたり、屋根や壁が剥がれ落ちたりしたままのものもあった。解体するのか残して改修するのかという選択を迫られているものも多かったようだ。難しい判断であったと推測できる。

熊本地震から8ヶ月後の熊本市新町・古町の町家。既に改修が始まっていた。（2016 年 12 月）

それから現在に至るまで、新町・古町地区の町家の復興の過程を見てきたが、解体され高層のマンションやホテルに建て替わったものもあれば、駐車場として利用されているものもある。その一方、行政や財団の財政的支援を得ながら、NPO や市民等の粘り強い取り組みにより、改修されたものもある。改修を終えた町家の所有者と話をする機会もあったが、先代から受け継いだ家や商売を何とか次の世代に引き渡したいという想いと地元熊本への愛着・誇りを強く感じた。

また、筆者が熊本大学に入学する前から熊本大学の木島安史先生や建築評論家の長谷川堯氏らが中心となって熊本の歴史的建造物の保存に取り組んでこられたが、新町・古町地区の復興にあたり熊本大学時代の先生方や先輩、同級生等が様々な場面で活躍する姿も見て、「文化都市・熊本」の歴史は脈々と受け継がれていると感じた。筆者はそうした方々の活躍を同窓生として大変誇りに思っている。

熊本地震を乗り越え、見事に蘇った新町の町家

熊本地震を乗り越え、見事に蘇った古町の町家

【阿蘇：前向き思考、地域一丸で取り組む復興、鉄道でつながる地域】

筆者は阿蘇神社や阿蘇大橋、南阿蘇村、益城町等にもできるだけ出かけ、復興の進捗状況や市民、NPO 等の活動を見てきた。南阿蘇村の一心行の桜は地震前と同じように咲き誇り、黄色の菜の花や青い空とのコントラストが鮮やかであり、多くの来訪者で賑わっていた。落ちない石で有名な免の石は熊本地震で残念ながら落ちたが、地元の方々がそれを逆手に取り、石が落ちた後の空洞の姿を招き猫に例え PR していた。これこそ「ピンチをチャンスに」という前向き思考の考え方であろう。

阿蘇神社は２度の地震で重要文化財である楼門が倒壊するなど神社内の施設が大きな被害を受けた。楼門の両サイドにある還御門と神幸門は 2018 年度に部分解体修理が完了し、倒壊した拝殿及び翼廊は 2021 年６月の完了を目標に再建工事が進められている。楼門は 2018 年度までに解体格納工事が完了し、2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている。2020 年８月に訪問した時には仮囲いに楼門の写真がプリントされており、関係者の粋な計らいを感じた。

南阿蘇村の黒川地区には九州東海大学の学生が多く暮らしていたが、熊本地震により多くのアパートや住宅が倒壊し、解体・更地化が進み、町並みだけでなく地域コミュニティが大きく変貌した。筆者は 2019 年４月に開催された復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加し、地域の方々や東海大学の学生と交流する中で、黒川地区の震災から３年の現状と復興への歩みを知ることができ、大変有意義な一日となった。黒川地区は阿蘇大橋の崩落現場も目の当たりにでき、震災の歴史を後世に伝えることのできる貴重な場所である。地域の方々の熱い想いで地域が再生していくことを願ってやまない。

南阿蘇村 一心行の桜

南阿蘇村 落石前の免の石（左）、落成後の免の石（右）

阿蘇市 阿蘇神社の楼門では解体格納工事を経て、2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている（仮囲いに楼門の写真がプリントされている）。

南阿蘇村 黒川地区の復興イベントへの参加

また、熊本地震では鉄道も甚大な被害を受け、地域の方々の生活にも多大な影響を与えた。南阿蘇鉄道（立野～高森間 17.7km）は熊本地震から３ヶ月後の 2016 年７月に一部区間（中松～高森間 7.1km）で開通しており、筆者は 2019 年 11 月と 2020 年５月に乗車した。職員だけでなく沿線の住民の皆さんが地域に誇りを持っていることをいろいろな場面で感じることができた。なお、残りの区間（立野～中松間 10.6km）は 2023 年夏の全線開通を目標に整備が進められている。

JR 豊肥本線は熊本地震で肥後大津～立野～阿蘇駅間（27.3km）で不通になっていたが、2020 年８月８日に全線復旧。筆者も復旧から８日後の８月 16 日に乗車し（阿蘇～立野往復）、久し振りに車窓からの風景と立野駅でのスイッチバックを楽しんだ。コロナ禍の中での全線復旧となったが、沿線の方々の喜びで溢れていた。

南阿蘇村　南阿蘇鉄道への乗車（左）、沿線の方々の歓迎（右）

南阿蘇村～阿蘇市　JR豊肥本線（立野～阿蘇駅間）への乗車（左）、車窓からの風景（右）

補足になるが、筆者は 2019 年４月に南阿蘇村黒川地区で開催された復興イベント「南阿蘇・黒川ウォーク」に参加する朝、建築評論家の長谷川堯氏の訃報を新聞で目にした。長谷川氏は前に紹介したとおり、1970 年代はじめに熊本大学の木島安史先生らと熊本の歴史的建造物の保存に取り組まれ、「文化都市・熊本」の原点を創ってこられた先生である。筆者は当日、阿蘇にある木島家の別荘「孤風院」を訪ね、1992 年に亡くなられた木島先生に長谷川氏の訃報を伝えた。熊本地震を乗り越え、熊本の歴史的建造物が受け継がれていくベースを創った２人の先生のご冥福を改めてお祈り申し上げるとともに、感謝の気持ちを伝えたい。

また、2021 年１月４日に放送された NHK の番組「ファミリーヒストリー」では、大河ドラマ

「麒麟がくる」の主人公・明智光秀を演じている長谷川博己氏（長谷川堯氏の長男）が特集されており、長谷川家の歴史とともに長谷川堯氏の知られざる素顔やエピソードが紹介され、感慨深いものがあった。

【一つひとつのストーリーの積み重ね、人と人との出会いやつながり】

「熊本の復興の過程を巡る旅」を進める中で、2017 年度の研究で紹介させていただいた熊本市上之裏通りの「トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート」の店主・新本高志さんを熊本城やその周辺で何度も見かけた。新本さんは 30 年以上自転車のペダルをこいで、丹精込めて作られたパウンドケーキだけでなく、地域の方々に元気をお届けしている。熊本市内だけでなく、益城町や阿蘇、八代、天草、そして福岡県内にも配達することもあるそうだ。

夢の実現に向けて頑張っている姿や、人と人との出会いやつながり、笑顔を大切にされている新本さんを町で見かけたり、お店で話したりする時に筆者はいつも元気とエネルギーをもらっている。新本さんとの出会いや彼から学んだ「一つひとつのストーリーの積み重ね」や「人と人とのつながりを大切にした生き方」を今後も実践していきたいと考えている。

左：「トタン屋根のケーキ屋 ア・ラモート」の店主・新本高志さん（右）と筆者（左）
右：店内の様子

また、オオクワガタが縁で筆者が 2000 年から毎年のように訪問している南阿蘇村のペンション「ふらいんぐジープ」は 2016 年の熊本地震で被害を受けたが、約３ヶ月後に営業を再開。筆者も同年８月に訪れ再会を喜び合った。熊本地震を乗り越えてのオーナー夫妻の前向きな考え方は、筆者にも大変参考になり、「オオクワガタから始まる縁」を「熊本地震からの復興へと向かう縁」に変えて、今後もペンションのオーナー夫妻との交流を深めていきたいと考えている。

ペンション「ふらいんぐジープ」のオーナー・酒井清行さんと室内の様子

このように熊本の復興の過程を巡る旅は、筆者にとっては人との出会いの旅であり、感動の旅である。筆者は、今後も復興の過程を見に定期的に熊本を訪問し、地域の方々と対話・交流することを楽しみにしていきたい。これが筆者のできる熊本復興への継続的な支援である。

復旧が進み 2021 年4月 26 日の特別公開第3弾開始(天守閣内部公開)を待つ熊本城(左)。
長塀は 2021 年1月末に復旧工事が完了し、城内にある被災した 13 棟の国重要文化財の復旧第一号となった(右)。

2023 年度の完了を目指して復旧工事が進められている阿蘇神社の楼門(左)。
拝殿は 2021 年6月の完了を目指して再建工事が進められている(右)。

2021 年3月7日に開通した新阿蘇大橋。旧阿蘇大橋から約 600m下流に建設された(左)。
旧阿蘇大橋は 2016 年4月の熊本地震で崩落したままになっている(右)。

※6枚の写真は 2021 年3月 26 日撮影

第４章　小さなまち旅の成果の筆者の身近なエリアへのフィードバック ～博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想～

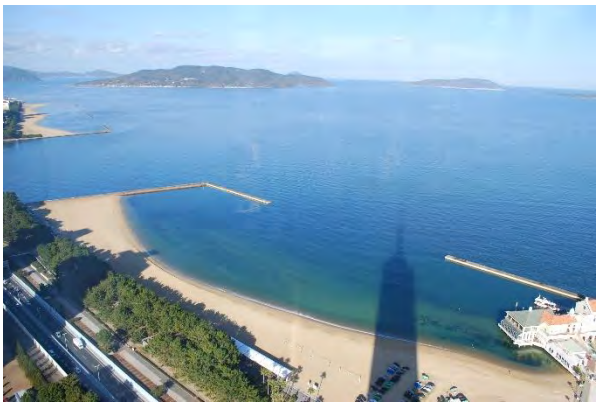
１　プロジェクトの対象エリアと取り組みの視点

（１）「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」の対象エリア

【筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリア】

筆者は主に九州一円を対象に小さなまち旅を展開している。旅のテーマは風景や気候、文化といった大きなテーマから、花や樹木といった身近なテーマまで様々である。旅を重ねる中で地域の個性を至る所で発見し、様々な魅力資源（モノ）やそれらの資源を活かして活動している人々や組織（ヒト）を見てきた。また、「モノ」と「ヒト」が結合して「モノ×ヒト＝コト（ストーリー）」となり、まちづくりの成果を上げている地域も見てきた。

一方、筆者の身近な場所にも多くのテーマを内包するエリアがある。それは筆者が提唱する「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」のエリアであり、筆者にとっては身近な「職・住・遊・活」の場でもある。第４章では、これまでの小さなまち旅の成果をこのエリアにフィードバックし、プロジェクトの実現に向けて何ができるのか提案する。

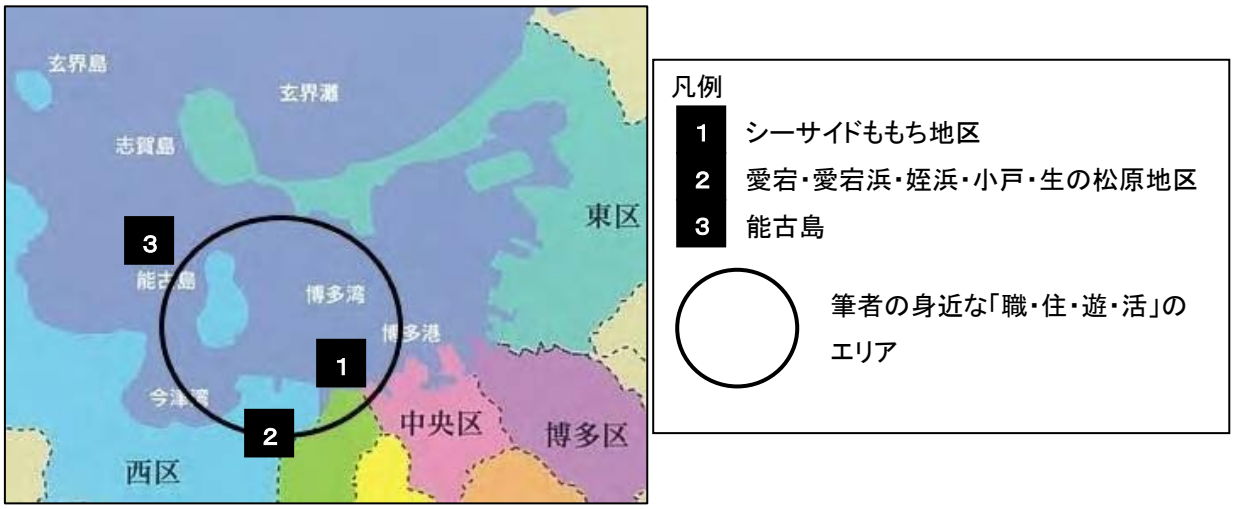


シーサイドももち海浜公園・能古島方面（左）、愛宕浜方面（右）

室見川・愛宕山方面（左）、姪浜・小戸・生の松原方面（右）
福岡タワーから見た筆者の職・住・遊・活のエリア

「職」のエリアは福岡市役所時代の業務での思い出のフィールドのひとつであるシーサイドももち地区であり、住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）と都市景観形成地区の指定が該当する。これについては、第２章（P72）にも概要を紹介している（2016 年度の報告書に詳しく紹介）。「住」のエリアは 1987 年から居住している姪浜校区（12 年）及び愛宕浜校区（22 年）であり、通算 34 年になる。「遊」のエリアは博多湾に沿った身近なレクリエーションエリアであり、シーサイドももち地区、愛宕山、室見川、愛宕浜海浜公園、生の松原、能古島、博多湾等が

該当する。



博多湾と筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリア

また、「活」は筆者が 2007 年～2016 年まで活動を牽引してきた唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動であり、活動エリアとしては旧唐津街道を中心とした姪北校区、広域的には姪北校区を中心とした姪浜エリア（姪北校区、姪浜校区、内浜校区、愛宕校区、愛宕浜校区）が該当する。姪浜エリアでは寺社、町家、路地、老舗のお店等の古くからの魅力資源に加え、マリノアシティ福岡や愛宕浜海浜公園等の博多湾を埋め立てて誕生した新しい魅力資源が存在し、距離的にはそれらの新旧の魅力スポットを歩いて回れることも大きな特徴である。

筆者が唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時に作成した「新旧の魅力スポットを巡る姪浜の回遊ルート」

職のエリア：シーサイドももちクリスタージュ（左）、愛宕浜から見たシーサイドももち（右）

住のエリア：現在住んでいる西福岡マリナタウン（左）、愛宕浜海浜公園（右）

遊のエリア：能古島アイランドパーク（左）、愛宕神社の参道（右）

活のエリア：興徳寺（左）、姪浜住吉神社（右）

（２）取り組みの視点

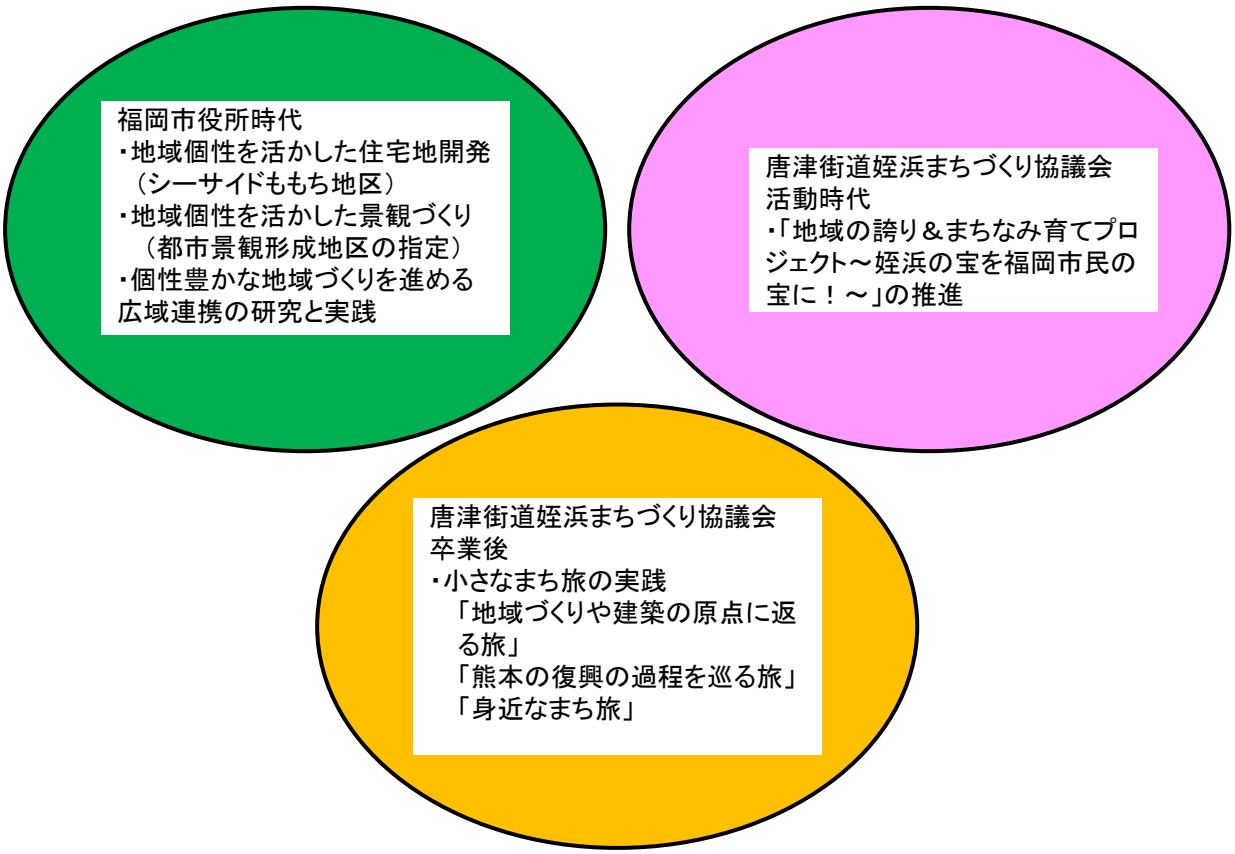
【福岡市役所での業務、姪浜でのまちづくり活動の実践、小さなまち旅の実践を活かした視点】

繰り返しになるが、福岡市役所時代に印象に残るのは、「地域の個性を活かしたシーサイドももち地区の住宅地開発（クリスタージュ）」、「地域の個性を活かした景観づくりを進める都市景観形成地区の指定（新しいまちづくりが進むシーサイドももち地区、歴史的環境地区である御供所地区）」「個性豊かな地域づくりを進める広域連携の研究と実践」の３つの業務であり、共通しているのは「地域の個性を最大限に活用したまちづくりと景観づくり」である。

また、唐津街道姪浜まちづくり協議会での活動時代（2007.3～2016.5）には、それらの経験を活かして「地域の誇り＆まちなみ育てプロジェクト～姪浜の宝を福岡市民の宝に！～」をテーマに活動し、様々な成果を上げてきた（第２章にも概要紹介、2016～2017 年度の報告書に詳しく紹介）。

唐津街道姪浜まちづくり協議会卒業後は、「身近なまち旅」の一環として、シーサイドももち地区～愛宕・愛宕浜・姪浜・生の松原地区～能古島～博多湾を対象に、「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等の多彩なテーマでまち歩きを実践している。

このように筆者の身近な「職・住・遊・活」のエリアである「博多湾姪浜エリア」は、筆者ならではのエリアであり、筆者の福岡市役所時代の業務経験、姪浜でのまちづくり活動の実践、そしてポスト姪浜として始めた小さなまち旅の実践を活かした提案が可能なのである。



福岡市役所での業務、姪浜でのまちづくり活動の実践、小さなまち旅の実践を活かした視点

（３）広域連携の視点を踏まえた博多湾姪浜エリアでの筆者のこれまでの提案及び実践活動

【唐津街道姪浜地区を中心とした回遊ルートづくり】

筆者が姪浜のまちづくり活動に取り組んでいた頃の初期の取り組みとして姪浜の魅力資源集『唐津街道姪浜 「見て歩き」「食べ歩き」～地域の魅力資源の再発見～』を作成し、その中で唐津街道姪浜地区を中心とした回遊ルートづくりを提案し、中核となる唐津街道姪浜地区の魅力の創造と発信を目指してきた（2008 年３月）。

唐津街道姪浜の周辺には、愛宕神社や小戸大神宮などの歴史的資源の他、マリノアシティなどの新しい魅力スポットがあります。神話の時代（神功(じんぐう)皇后伝説など）と関わりの深いとされる小戸大神宮、中世の元寇防塁、近世の愛宕神社、現代のマリノアシティなど、いくつもの時代が交差し、様々な時代の歴史が息づいています。今後は、それぞれの魅力資源の連携による回遊ルートづくりと相互の活性化がまちづくりのテーマとなります（愛宕神社～唐津街道姪浜～小戸大神宮が東西の歴史回遊軸とすれば、姪浜駅～唐津街道姪浜～マリノアシティは南北の賑わい回遊軸となる可能性を秘めています。）。

そのためには、中核となる唐津街道姪浜の魅力の創造と発信が求められます。

筆者による唐津街道姪浜地区を中心とした回遊ルートづくりの提案（2008年３月）

【広域連携を視野に入れたこれまでの実践活動、姪浜まち旅プロジェクト計画の作成】

筆者の唐津街道姪浜まちづくり協議会活動時代における広域連携の取り組みとしては、遊覧船に乗って博多湾から福岡の街並みや花火大会を見る事業があり、地域内外から多くの方々に参加いただくなど好評を博した。海や港との関わりの深い姪浜らしさにこだわったもので、筆者にとっては「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト」を見据えたものであった。

また、筆者が2016年３月に作成した『姪浜まち旅プロジェクト計画』の中では、東西の歴史回遊軸（愛宕神社～唐津街道姪浜～小戸大神宮～生の松原）のまち歩きに加え、南北の賑わい回遊軸（姪浜駅～唐津街道姪浜～マリノアシティ・能古島）のまち歩きやレンタサイクルについても提案している（詳細は2017年度研究報告書「参考資料４」に紹介）。

「とっておきの姪浜！遊覧船で巡る福岡の歴史とまちなみ」の様子（2014 年９月）

「夏休み親子まちなみ探検隊」の様子（2015年８月）

「遊覧船から見る福岡のまちなみと花火大会」の様子（2015年８月）

姪浜まち旅プロジェクト計画（概要）

1　活かすべき多彩な魅力資源

（１）寺社　（２）町家町並み　（３）路地　（４）海、港

（５）まちかど遺産　（６）歴史、物語　（７）食　（８）お薦めのお店

2　今後考えられるプログラム

（１）総合型まち歩き（今までの景観歴史発掘ガイドツアー）

○ショートコース（半日コース）　○ロングコース（一日コース）

○東コース（住吉神社～愛宕神社）　○西コース（住吉神社～小戸大神宮～生の松原）

（２）テーマ型まち歩き

○白うさぎ伝説を巡るツアー（姪浜駅南口モニュメント～興徳寺～龍王館～旦過だるま堂）

○寺社巡りツアー（今まで案内していない寺社も含む寺社限定ツアー）

○歴史巡りツアー（古代～現代までを体験できるコース設定）

○海に特化したツアー（魚市場～造船工場～海豚の慰霊碑～姪浜漁協～双胴船～クルーザー）

○路地巡りツアー（住吉神社周辺の路地、光福寺周辺の路地、順光寺周辺の路地など）

○伝説・物語巡りツアー（白うさぎ伝説、武内宿禰伝説、探題塚伝説、元寇伝説）

（３）季節型イベント

○歴史散策と桜の名所巡りツアー（春）　○歴史散策と紅葉巡りツアー（秋）

○着物でそぞろ歩き（春、秋）

（４）講話

○寺社講話（住職や宮司の講話＆境内散策）

（５）コンサート

○寺社での灯明コンサート

○町家コンサート

○町家コンサート＆姪浜ブランド料理

（６）体験型イベント

○お寺での座禅体験、点茶体験

○蒲鉾作り体験、削り節削り体験

（７）まち歩き＆お薦めのお店でランチ

○白うさぎ伝説を巡るコース＆
　姪浜ブランド店でランチ

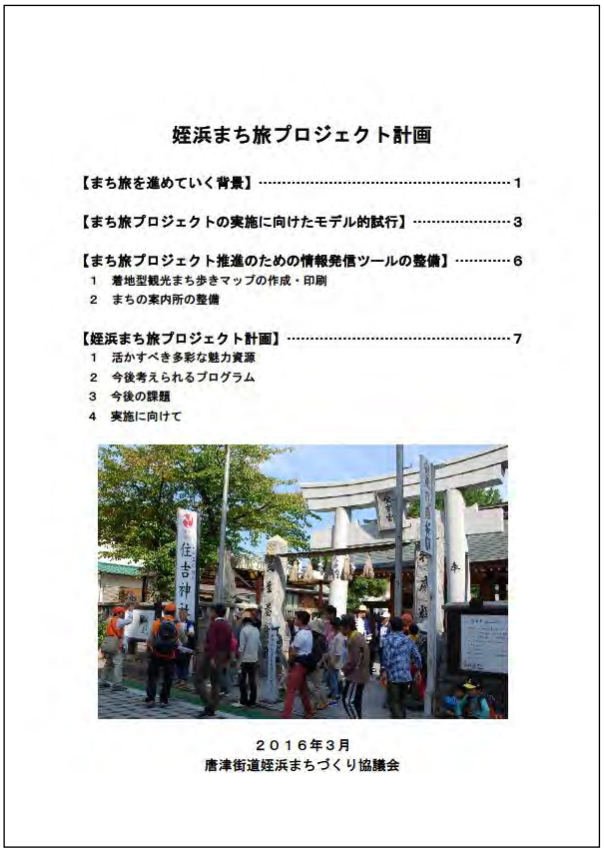
○景観歴史発掘ガイドツアー＆
　姪浜ブランド店でランチ

（８）ウォークラリー

○姪浜駅～唐津街道・魚町通り周辺～
　マリノアシティ or 能古島
　※JR 九州や福岡市交通局との連携検討

（９）子どもたちを対象にしたイベント

○夏休み親子まちなみ探検隊



姪浜まち旅プロジェクト計画

【まち旅を進めていく背景】……1

【まち旅プロジェクトの実施に向けたモデル的試行】……3

【まち旅プロジェクト推進のための情報発信ツールの整備】……6
1　着地型観光まち歩きマップの作成・印刷
2　まちの案内所の整備

【姪浜まち旅プロジェクト計画】……7
1　活かすべき多彩な魅力資源
2　今後考えられるプログラム
3　今後の課題
4　実施に向けて

２０１６年３月
唐津街道姪浜まちづくり協議会

筆者が2016年３月に作成した『姪浜まち旅プロジェクト計画』より抜粋

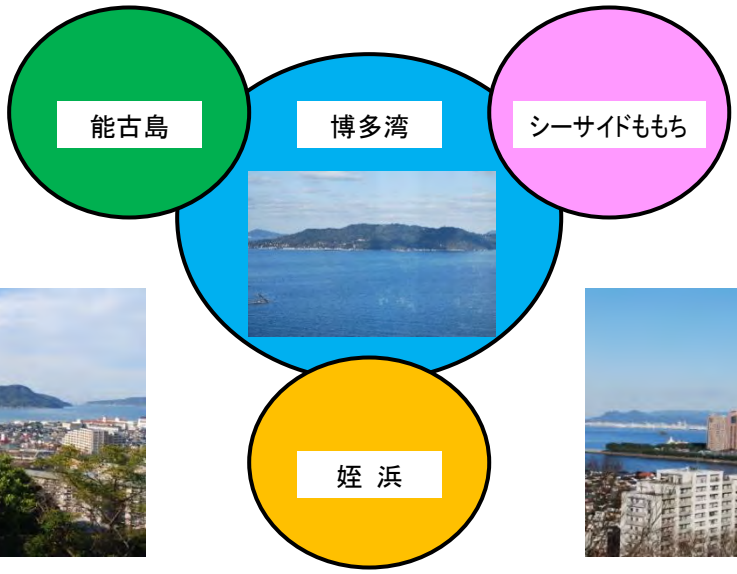
【広域的に見たコントラストのある景観と４つの視点場】

筆者は2017年度の研究報告の中で、姪浜周辺の４つの視点場とそれらの視点場から見たコントラストのある景観について次のように述べている。

> 姪浜周辺を広域的に見ると「福岡タワー」「愛宕神社」「能古島」「博多湾」という４つの眺望ポイントが存在する。こうした視点場から見る福岡市のコントラストのある景観は魅力的であり、福岡市の都市形成の歴史を垣間見ることができる。

能古島からシーサイドももち方面を見る

福岡タワーから姪浜方面を見る



愛宕神社から能古島方面を見る

愛宕神社からシーサイドももち方面を見る

【都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパス構想】

筆者は2017年度の研究報告の中で、近隣地域と連携した多彩なフットパスの推進について次のように述べている。

> 「フットパス」とは、イギリスを発祥とする『森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径（こみち）【Path】』のことである。 本場イギリスではフットパスが国土を網の目のように縫い、国民は積極的に歩くことを楽しんでいる。 近年、日本においても様々な地域において、各々の特徴を活かした魅力的なフットパスが整備されてきている（日本フットパス協会 HP より）。
>
> 都市化の進んだ姪浜やその近郊においては、こうした定義通りのフットパスは難しいかもしれないが、多彩な魅力資源（自然的資源、歴史的資源、都市的資源）を歩いて巡るコースの設定は可能であり、福岡型の新たなフットパスの実現も可能である。以下に筆者の私案を紹介したい。

【都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパス構想】

対象エリアは「シーサイドももち」「姪浜」「能古島」の３つのエリアと「博多湾」である。シーサイドももちは新しい都市景観、姪浜は多彩な歴史、能古島は歴史と自然が特徴であり、各エリアで特徴的な緑道、海浜公園、路地、自然の探勝路等があり、多彩な魅力を体感できる。また、前述したとおり「福岡タワー」「愛宕神社」「能古島」「博多湾」という４つの眺望ポイントがあり、福岡市のコントラストのある景観や都市形成の歴史を感じることができる。

ルートとしては、各エリア内、２つのエリア、３つのエリアといった組み合わせが可能であり、広域的で変化に富んだまち歩きを楽しむことができる。健康ブームの中、多くの市民がウォーキングを楽しまれており、各エリアの多彩な魅力資源を巡るいろいろなコース設定をすることで、地域の魅力を体感体験しながらまち歩きを楽しむことができる。

全国で進められつつあるフットパスは、地域の魅力を再発見し、ウォーキングを中心にした現地での体験・交流の中で、その魅力を来訪者に感じていただくことで、地域への誇りや愛着の向上、ひいては地域の活性化につながると考えられている。

筆者は、フットパスは自然の風景の中だけでなくても、成り立つのではないかと考えている。シーサイドももちは埋立地であり、近代的な都市景観や建築物が特徴であるが、東西南北の緑道、河川沿いの緑道、海浜公園等の公共空間の他、民有地においても緑豊かな景観づくりが進められており、都市的な環境の中にも豊かな自然環境が形成されている。また、姪浜においても愛宕神社参道、海浜公園、小戸から生の松原にかけての海沿いの遊歩道や松林の中の散策路（元寇防塁等の史跡もある）等がルートとして考えられ、その中で地域の歴史や文化等を感じてもらうことができる。大上段に考えることなく、地域や個人でできることから取り組んだらいいのではないだろうか。

「シーサイドももち」「姪浜」「能古島」、そして「博多湾」の組み合わせによる『都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパス構想』については、今後、筆者自身が取り組んでみたいテーマでもある。

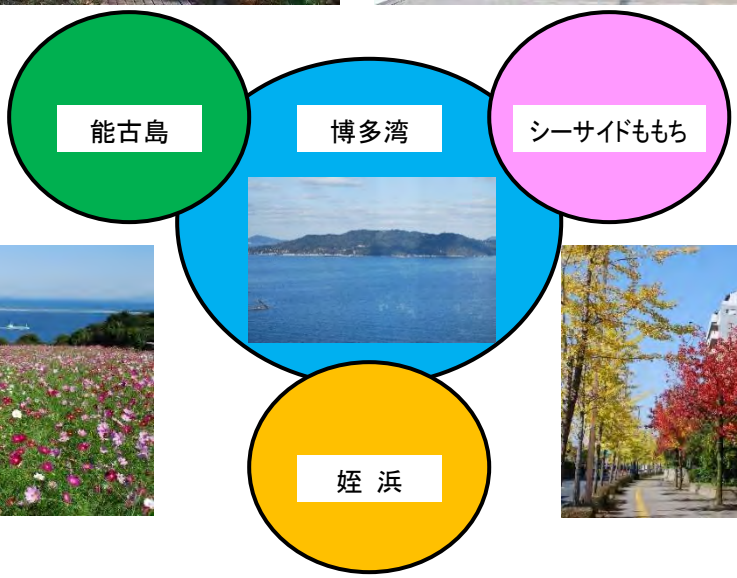
各エリアの特徴等

	ｼｰｻｲﾄﾞももち	姪　浜	能古島	博多湾
魅力資源	都市景観 景観に配慮された建築物	歴史 寺社 町家町並み 路地 元寇防塁跡	自然 歴史 ｱｲﾗﾝﾄﾞﾊﾟｰｸ	海（博多湾） 周囲の自然景観（海、山、緑）
眺望ポイント	福岡タワー	愛宕神社	島の至る所（ｱｲﾗﾝﾄﾞﾊﾟｰｸ、自然探勝路等）	フェリー
考えられるルート	東西南北の緑道 河川沿いの緑道 海浜公園	愛宕神社参道 唐津街道 狭い路地 海浜公園 海沿いの遊歩道 松林の中の散策路	自然探勝路	能古渡船場～能古島（フェリー、海上タクシー）
推進体制	各エリアのまち歩きのガイド団体・グループ・人 まちづくり団体・グループ・人			
必要なツール	お薦めのコースを紹介した全体のマップ 各エリアの魅力資源を紹介するマップ			

【能古島】

【シーサイドももち】

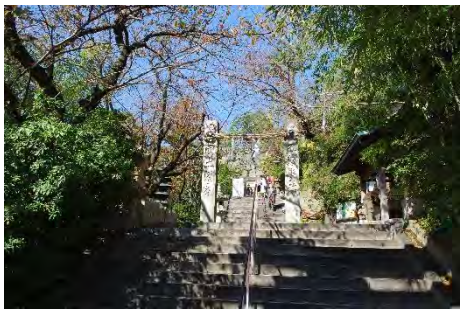
【自然、歴史】



【都市景観】

【歴史】

【姪　浜】



都市・歴史・自然の風景を楽しむトライアングルフットパスのイメージ

２　小さなまち旅の一環としての身近なまち旅の実践

（１）広域連携の実践に向けたまち歩き

筆者は九州一円をフィールドに様々なテーマでまち旅を実践しているが、多くのテーマを内包している魅力的な博多湾姪浜エリアにおいても「眺望」「景観」「回遊」「歴史」「自然（海・山・松原）」「健康」「広域連携」「観光」「フットパス」等の多彩なテーマでまち歩きを実践している。

何よりも４つの眺望ポイントを有していることが魅力であり、それらからは都市のコントラストや都市形成の歴史を見ることができる。また、シーサイドももち地区～生の松原を歩くと生業や日々の生活、レクリエーションが息づいた博多湾の多彩な風景を見ることができる。小戸の海岸や室見川から見る夕景もきれいであり、夕日と雲が織り成す風景にも非日常を感じることもある。

特徴がないと考えられている住宅地や普段何気なく歩いている地域であってもテーマを持って歩くと、いろいろな魅力資源を発見することができる。例えば、住宅街の庭に植えている花や樹木に季節感を感じることも多い。枝垂れ梅やミモザの花の美しさにハッとすることもある。ケヤキやイチョウの街路樹は、新緑や紅葉の時には特に印象的である。

（２）各地区の概要

【シーサイドももち地区】

シーサイドももち地区は、住宅地開発（シーサイドももちクリスタージュ）や都市景観形成地区の指定に深く関わってきており、筆者の福岡市役所時代の思い出のフィールドであり、現在は身近なレクリエーションエリアの一つでもある。近代的な都市景観や建築物が特徴であるが、東西南北の緑道、河川沿いの緑道、海浜公園等の公共空間の他、民有地においても緑豊かな景観づくりが進められてきており、都市的な環境の中にも豊かな自然環境が形成されている。

愛宕浜から見たシーサイドももち（上）
福岡タワーからの眺望（下）

よかトピア通りの街並み（上）
世界の建築家通りの街並み（下）

集合住宅地区の街並み（上）
室見川沿いの緑道（下）

シーサイドももち地区

【愛宕・豊浜地区】

室見川を挟んでシーサイドももちに隣接する愛宕・豊浜地区は、愛宕神社をはじめとした歴史資源や愛宕山、室見川といった自然資源が特徴である。筆者は姪浜に住んで 34 年になるが、今でもよく訪れるのが愛宕神社とその参道沿いにある観音寺、音次郎稲荷神社である。桜の咲く頃になると参道沿いの桜だけでなく、観音寺の桜、愛宕山観光道路沿いの河津桜、ケーブルカー山上駅跡付近の桜等が美しさを競演する。冬から初夏にかけては、各種のサギが飛来し営巣の風景を見ることができる。

また、豊浜団地を歩くと季節感豊かな様々な花を楽しむことができる。室見川での初夏の潮干狩りの風景や冬の鴨の群れを見ることも楽しい。朝日や夕日の風景もきれいである。一般的な住宅地であっても、いろいろな個性を発見できるのである。

愛宕神社（上）
参道の桜並木（下）

愛宕神社参道沿いにある観音寺（上）
豊浜団地内の枝垂れ梅（下）

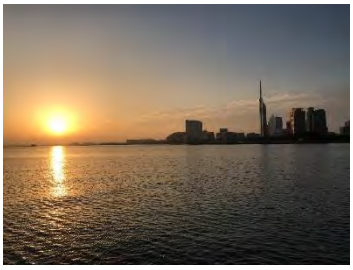
室見川での潮干狩りの風景（上）
室見川の夕景（下）

愛宕・豊浜地区

【愛宕浜地区】

筆者が現在暮らしている愛宕浜地区は豊浜・姪浜地区の博多湾側に位置し、埋め立てによって生まれた比較的新しい街であり（1980 年代後半から住宅地開発）、博多湾に面した海浜公園と緑豊かな居住環境が特徴である。海浜公園ではウォーキングやランニングをする人、犬と散歩する人、釣りやサーフィンをする人などで賑わいを見せている。海浜公園からはシーサイドももちや能古島、志賀島等を臨むことができ、海に開かれた福岡の景観的な特徴を満喫できる場所でもある。朝日が昇る風景や夕日が沈む風景も愛宕浜ならではの風景である。

また、愛宕浜中央公園や地域を南北に縦断する緑道、外周の道路では樹木が成長し、季節感を演出している。普段何気なく過ごしているまちであるが、テーマを持ってまちを歩くといろいろな発見をすることができる。



福岡タワーから見た愛宕浜の街並み（上）
愛宕浜海浜公園（下）

シーサイドももち方面の朝景（上）
糸島方面の夕景（下）

街路樹の紅葉

愛宕浜地区

【姪浜地区】

唐津街道を中心とした姪浜地区には寺社、町家、路地、魚市場、古くからのお店等が息づき、福岡市内でも有数の歴史的環境を有している。しかし、近年の町家の減少やマンションの建設に歯止めがかからず、町並みが大きく変貌するとともに、多くのワンルームアパートの進出により古くからのコミュニティも大きく変化してきている。筆者はここで約 10 年間活動してきたが、近年の町並みやコミュニティの変化には危機感を覚えている。

この地域を歩く機会は激減したが、歩く度に様々な課題が見えてくる。地域内にはまちづくりを標榜する団体がいくつかあるが、各団体の連携に加え、広域的な観点で地域を評価し、広域的エリアとして個性を打ち出していく必要がある。筆者が提唱する「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」はこうした視点から生まれた構想でもある。

姪浜住吉神社（上）
興徳寺（下）

探題塚（上）
唐津街道沿いの西構口付近の町家町並み（下）

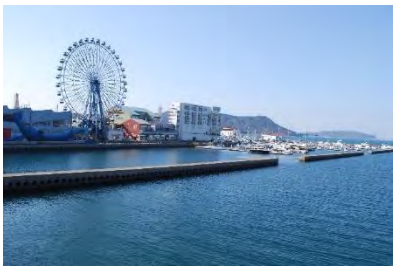
姪浜魚市場（上）、多くの高層マンションの進出による町並みの変貌（下）

姪浜地区

【小戸・生の松原地区】

名柄川を挟んで姪浜地区の西側に位置する小戸・生の松原地区には、マリノアシティ福岡をはじめとする商業施設、小戸公園や小戸ヨットハーバー等のレクリエーション施設、小戸大神宮や元寇防塁跡等の歴史的資源があり、それらを回遊できる博多湾沿いの遊歩道等も整備されている。「都市」「自然」「歴史」の３つの要素を巡る福岡型のフットパスを展開できるエリアである。

また、小戸や生の松原の海岸から見た博多湾の景観はダイナミックであり、海、空、山、島のコントラストが素晴らしい。特に小戸の夕景はきれいであり、古くからの歴史を感じる瞬間でもある。博多湾を行き交うフェリーや漁船、ヨットの風景もこのエリアならではのものであり、筆者の身近なフットパスのコースの一つでもある。



マリノアシティ福岡（上）
小戸大神宮（下）

小戸の夕景（上）
生の松原元寇防塁跡（下）

生の松原（上）
生の松原から見た博多湾（下）

小戸・生の松原地区

【能古島】

姪浜渡船場からフェリーで 10 分の能古島も筆者の身近なまち旅のエリアである。一番の見どころはアイランドパークであり、桜とコスモスのコントラストが美しい春、コスモスが咲き乱れる秋には毎年のように訪問している。夏のひまわりや冬の水仙など季節ごとに様々な花を楽しむことができる。また、そこで作られたサツマイモを使ったイモ天や能古島名産の甘夏 100%ジュースも久保田睦子さんらの手作りで本当に美味しい。

能古島にはこの他、白髭神社や永福寺、能古焼古窯跡、能許万葉歌碑、能古博物館等の魅力スポットがあり、フットパス感覚で回遊できる。また、能古島から見るシーサイドももちの景観は「海に開かれたアジアの交流拠点都市・福岡」を象徴する景観である。自然探勝路から見え隠れする博多湾の風景は、大陸との関わりの深い福岡の歴史を感じさせる。

福岡タワーから見た博多湾と能古島（上）
能古島から見た博多湾とシーサイドももち（下）

季節ごとに様々な花を楽しめる能古島
アイランドパーク（上）、白髭神社（下）

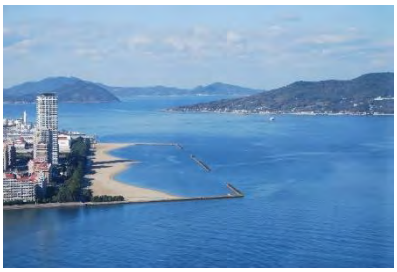
能古焼古窯跡（上）
自然探勝路（下）

能古島

【博多湾】

今まで紹介してきた「シーサイドももち地区」「愛宕・豊浜地区」「愛宕浜地区」「姪浜地区」「小戸・生の松原地区」「能古島」をつなぐのが博多湾である。筆者は愛宕浜に暮らして 22 年になるが、これらの地区から見る博多湾の街並み、博多湾から見る福岡の街並みは筆者のお気に入りの景観である。また、オランダ出身で姪浜漁港に停泊するヨットで暮らして 30 年以上になるヤップ・モルダーさん夫妻は、世界 55 ヶ国を旅して博多湾、そして福岡、姪浜に魅了された方で「博多湾に帰ってくるとほっとする。博多湾から見る福岡の景観は素晴らしい。美しい海と山に囲まれた福岡が好き」と語っていた。

筆者は「博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想」「福岡型フットパス構想」を提唱し、その実現に向けて身近なまち旅を実践している。



福岡タワーから見た博多湾（上）
博多湾を背景にした花火大会（下）

博多湾に浮かぶヨットの風景（上）
姪浜漁港の漁船が並ぶ風景（下）

筆者のマンションから見た博多湾の朝景（上）
博多湾から見た糸島方面の夕景（下）

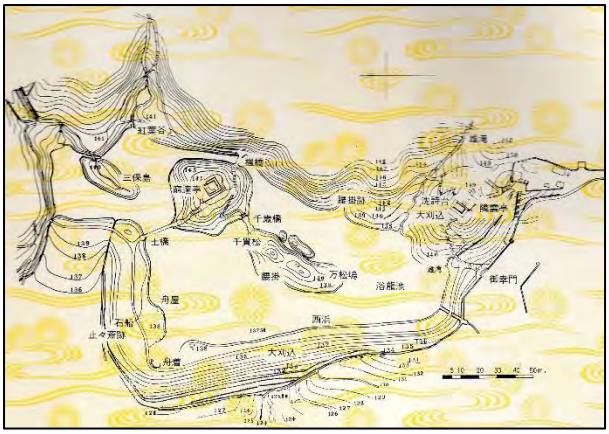
博多湾

３　博多湾姪浜 夢海道（回廊）&海遊（回遊）プロジェクト構想

（１）博多湾姪浜エリアのイメージ

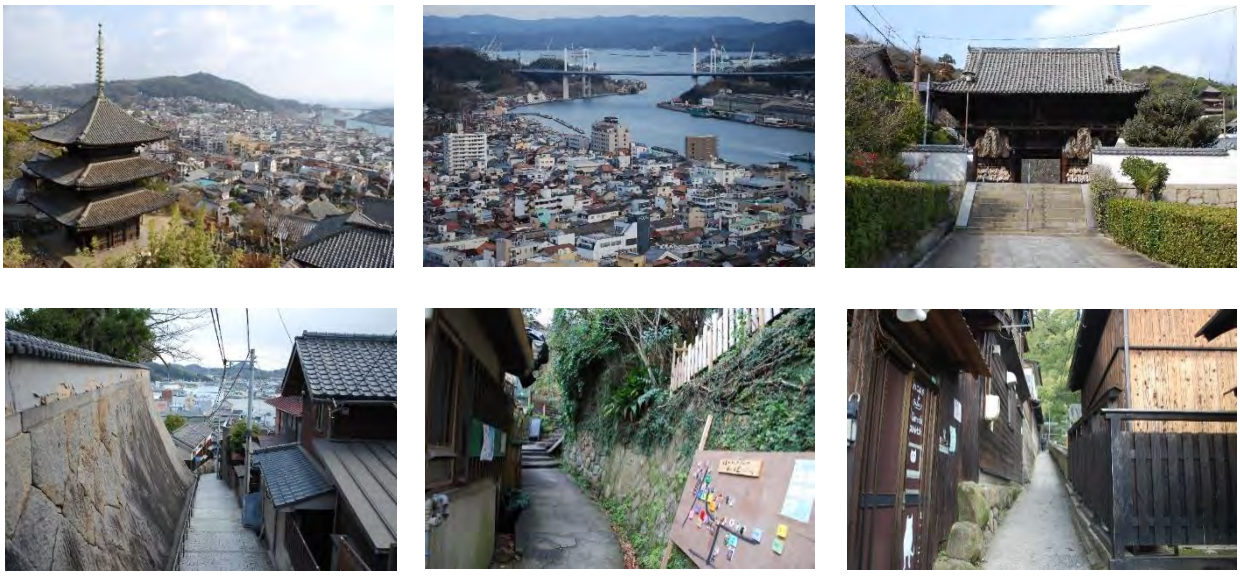
【博多湾に沿っては池泉回遊式庭園、内陸部は箱庭的都市のイメージ】

このエリアは、博多湾を大きな池水、博多湾岸の回遊路（海浜公園等）を園路、その周囲の山や丘を築山、能古島や志賀島を小島、フェリーを小船と捉えて回遊式庭園をイメージできる。日本庭園の池泉回遊式庭園と比較するとスケールはかなり大きくなるが、イメージとしては成り立つのではないだろうか。



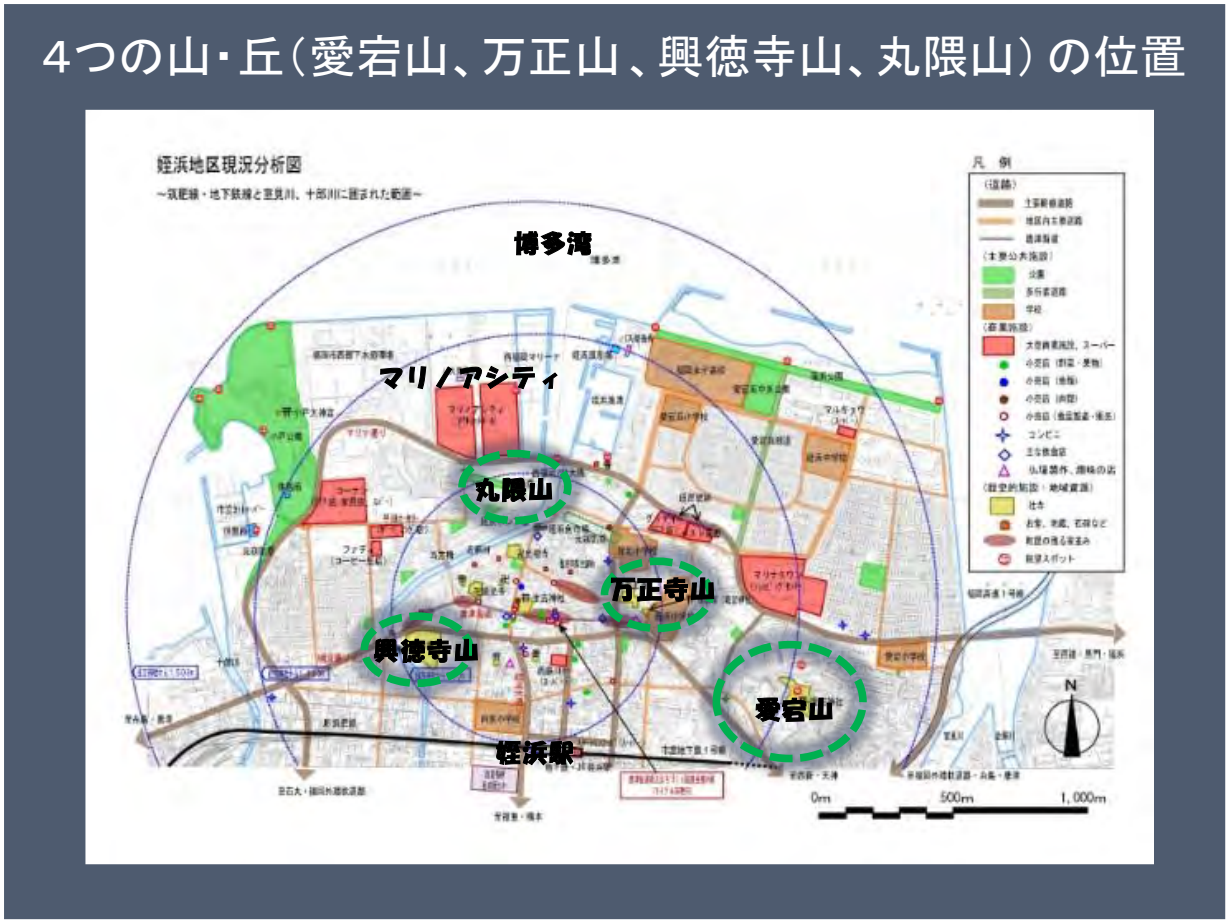
代表的な池泉回遊式庭園である修学院離宮（出典:㈶有識文化協会 1981 年 12 月発行「修学院離宮」）

また、都市の様々な景観構成要素を有する博多湾と姪浜周辺を一体的に捉えて箱庭的都市をイメージすることも可能である。箱庭的都市は尾道市の風景が代表的である。尾道市のパンフレットを見ると「尾道水道が紡いだ中世からの箱庭的都市～ああ、この風景に会いたかったんだ。」と記されている。尾道水道と尾道三山の間の限られた空間に、多くの寺社や家々がひしめき、坂道と路地でつながる景色が「箱庭」に例えられてきており、懐かしい心象風景を思い起こさせてくれる。



箱庭的都市と呼ばれる尾道市の景観

博多湾と４つの山（愛宕山、万正寺山、興徳寺山、丸隈山）の間に多くの寺社、町家、路地等が集積し、「宿場町」「商人町」「漁師町」「寺町」の４つの顔を備えた姪浜地区は箱庭的空間と呼んでもいいのかもしれない。博多湾に沿っては池泉回遊式庭園、内陸部は箱庭的都市をイメージできる。



４つの山・丘（愛宕山、万正寺山、興徳寺山、丸隈山）の位置

（２）博多湾姪浜 夢海道（回廊）＆海遊（回遊）プロジェクト構想

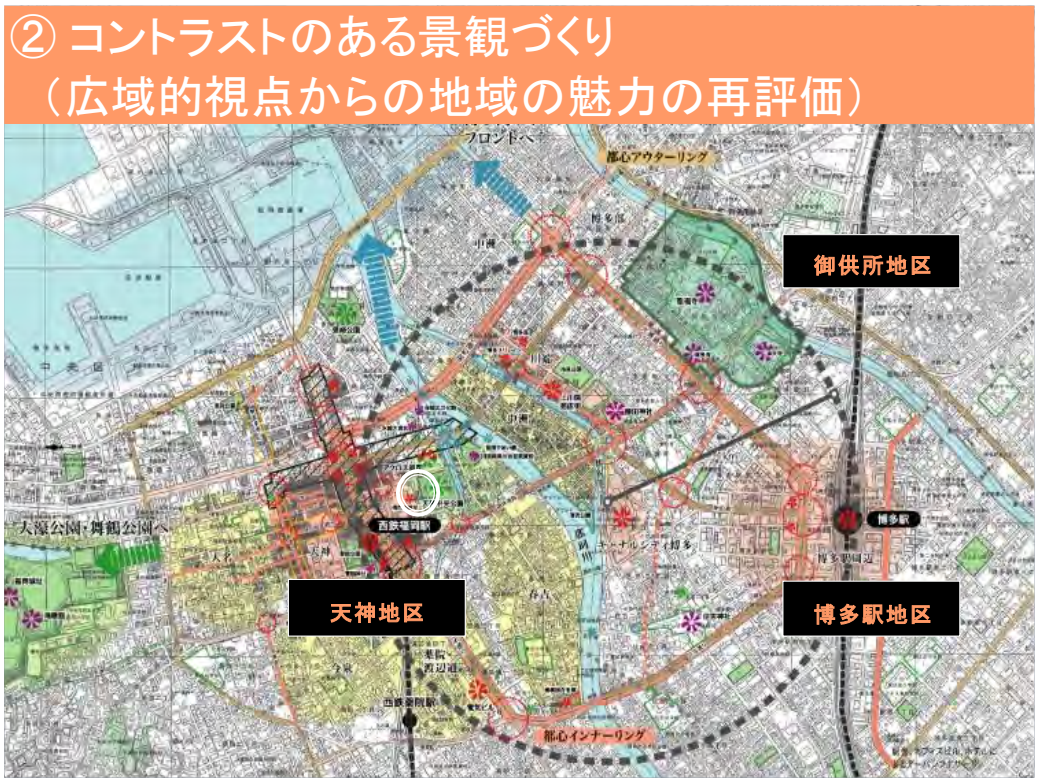
【コントラストのある都市空間】

福岡市は数年前からコントラストの感じられる都市づくりを打ち出しているが、その最たる例が天神地区や博多駅地区の現代的な景観と御供所地区に代表される博多部の歴史的な景観であろう。ヨーロッパの旧市街の存在に象徴されるように、新旧の景観が存在してこそ都市は深みを増し、時間を超えた重層的な空間が形成されるのである。

博多湾姪浜エリアについては、シーサイドももち地区やマリノアシティ博多、姪浜駅周辺が新しい景観ゾーンを構成し、唐津街道を中心とした姪浜地区（唐津街道姪浜地区）が歴史的な環境ゾーンを構成することで、深みとコントラストのある都市空間を形成することができる。そのためには、まずは広域的エリアの中で各地域の魅力を再評価し、エリア全体としてコントラストのある都市空間の魅力を再認識し、地域内外にその魅力を発信していくことが重要である。

その中で、ここ数年の唐津街道沿道の高層マンションや路地沿いのワンルームアパートの建設ラッシュ等により地域の個性である古い町家や路地の魅力が次第に失われ、歴史的環境地区とし

ての魅力が低減している唐津街道姪浜地区のまちづくりの取り組みが重要となってくる。コントラストのある都市空間というテーマは、唐津街道姪浜地区の個性を浮き彫りにするテーマでもある。



福岡都心部におけるコントラストのある景観づくりのイメージ（上）
広域的視点からの唐津街道姪浜地区の魅力の再評価のイメージ（下）
※2019 年 11 月の「第7回まちなみフォーラム福岡 in 唐津街道箱崎宿」での発表資料より（筆者作成）

【博多湾姪浜 まち旅プロジェクト＝博多湾を通して地域（モノ・ヒト・コト）をつなぐ】

筆者は 2007 年～2016 年に姪浜で多彩なまちづくり活動を実践するとともに、姪浜の多彩なよかとこを再発掘・活用する「姪浜まち旅プロジェクト計画」（前述）を作成した。これは、姪浜の魅力を地域内外に発信し、身の丈にあった観光スタイル（着地型観光）の定着を目指すとともに、コミュニティ交流や商店街活性化、地域に対する誇りや愛着の醸成につなげていくことを意図したものであった。そうした活動は、マスコミ取材回数の格段の増加や全国的な賞の受賞につながり、地域への来訪者が増えるなど地域の魅力発信や活性化に大きな成果を上げてきた。

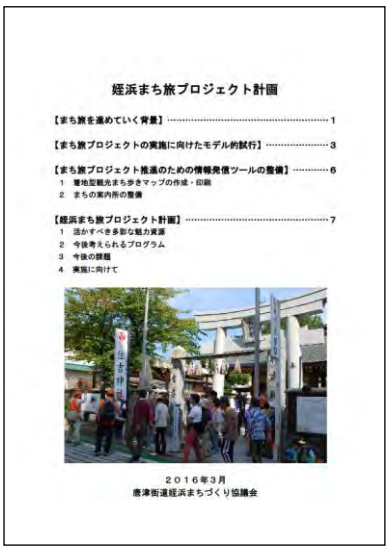
筆者が企画・実践してきた姪浜でのまち旅プロジェクトの例

また、シーサイドももち地区や能古島アイランドパークは多くの人が訪れる魅力スポットであるが、多彩な魅力資源を有する博多湾姪浜エリアで考えるとコントラストのある都市空間のイメージが明確になり、様々なテーマに沿ったまち旅が可能になる。以下に筆者の思いつくままに、まち歩きを中心としたテーマを挙げてみたい。

博多湾姪浜 まち旅計画のテーマの一例（まち歩きを中心としたテーマ）

○博多湾風景回廊を楽しむ
○福岡型トライアングルフットパスで博多湾の都市・歴史・自然（海・川・山）の多彩な風景を楽しむ
○４つの眺望ポイント（福岡タワー、愛宕山、能古島、博多湾）からの景観を楽しむ
○海のレクリエーション（ヨット、サーフィン、ビーチバレー、釣り、潮干狩り等）と生業（姪浜漁港、姪浜魚市場、海苔養殖、造船業、新鮮な魚を扱うお店等）が息づく博多湾の風景を楽しむ
○五感で８Ｋウォーキング（景観、観光、健康、回遊、海遊、回廊、海道、広域空間）を楽しむ
○「見る」「学ぶ」「食べる」「交わる」の４つの視点で博多湾の広域連携の旅を楽しむ
○能古島の歴史と自然、食を楽しむ
○博多湾ならではの地産地消を楽しむ
○シーサイドももちと姪浜の新旧の景観のコントラストを楽しむ
○身近な四季を楽しむ（桜巡り、新緑巡り、紅葉巡り）
○福岡市博物館～西新～姪浜～小戸～生の松原の元寇防塁を巡る
○博多湾と姪浜の歴史を学ぶ
○五ヶ浦廻船の歴史を学ぶ
○シーサイドももちのまちづくりと景観づくりを学ぶ
○シーサイドももちの現代建築を巡る

上記のような大テーマに沿って中小テーマを設定することで、様々なまち旅を企画できるのではないだろうか。久留米市や柳川市では精力的に「まち旅」や「ゆるり旅」を推進しているが、これは博多湾姪浜エリアでも十分成り立つと考えている。それだけの魅力資源を有しているエリアなのである。


姪浜まち旅プロジェクト計画

【まち旅を進めていく背景】……1
【まち旅プロジェクトの実施に向けたモデル的試行】……3
【まち旅プロジェクト推進のための情報発信ツールの整備】……6
1 着地型観光まち歩きマップの作成・印刷
2 まちの案内所の整備
【姪浜まち旅プロジェクト計画】……7
1 活かすべき多彩な魅力資源
2 今後考えられるプログラム
3 今後の課題
4 実施に向けて

2016年3月
唐津街道姪浜まちづくり協議会

筆者が作成した姪浜まち旅プロジェクト計画（2016 年3月）

久留米まち旅博覧会（左）と水郷柳川ゆるり旅（右）のパンフレット

様々なテーマが考えられる「博多湾姪浜 まち旅プロジェクト」は、博多湾を通して地域（モノ・ヒト・コト）をつなぐプロジェクトでもある。数年前、愛宕浜で新たな花火大会の計画があったが、交通渋滞や生活騒音等の懸念により住民の賛成を得られず、未だに実現していない。筆者の住むマンションでも説明会があったが、花火の美しさ、大きさ、高さ等が強調され、「花火を通して博多湾に面した地域をつなぐ」といったコンセプトが不足していたのではないかと思っている。

そうした大きな視点で取り組んでいれば、また違った展開があったかもしれない。大規模な花火大会もいいが、まち旅のような身近な取り組みを地道に粘り強く展開していくことも重要なのである。

また、博多湾姪浜エリアにはモノ（地域の魅力資源）は豊富にあり、それを活かしたコト（ストーリー、こだわり）を成立させるにはヒト（人材、組織）が重要になる。このエリアには様々な団体があるが、夢のあるプロジェクトに取り組んでいこうとすると、関係する団体との連携も必要になるし、まちづくりの志のある新たな人材も必要になってくる。筆者は現在、一人や家族で博多湾姪浜の旅を楽しんでいるが、今後賛同してくれる有志が集まれば、具体的な「博多湾姪浜 まち旅プロジェクト計画」を作成し、実践に取り組んでいきたいと考えている。

「博多湾姪浜 まち旅プロジェク」トを進めるにあたっては、姪浜周辺で多彩なまち歩きを実践している「西区歴史よかとこ案内人あこめグループ」との連携が不可欠である。

コロナ禍の中で「マイクロツーリズム」という旅行のスタイルがクローズアップされている。これは自宅から１～２時間以内の移動距離圏での近距離旅行を指し、近場で気軽に旅を楽しもうというものである。筆者の提案する「博多湾姪浜 まち旅プロジェクト」は小さなマイクロツーリズムといったところだろうか。筆者は今後も、九州圏域を中心とした「小さなまち旅」とあわせて、博多湾姪浜エリアを対象として五感で８Ｋウォーキング（景観、観光、健康、回遊、海遊、回廊、海道、広域空間）を楽しみながら、筆者の「職・住・遊・活」が息づく博多湾姪浜エリアの魅力資源を改めて掘り起こしていきたいと考えている。

【博多湾姪浜と歴史的にゆかりのある都市との広域交流（五ヶ浦廻船等）】

最後に、「広域交流」について夢のある話を紹介したい。下記のコラムは、筆者が 2013 年８月に秋田県横手市増田の町並みと内蔵を訪問した時の想いを書いた紀行文（抜粋）であり、北前船や五ヶ浦廻船を通じて縁があったかも知れない姪浜と増田の今後の交流について記したものである。地域づくりには現実的な課題への対応とともに、こうした夢も必要であり、その夢の実現に向けて活動していくのが「地域づくり活動」ではないかと筆者は考えている。

日本海を隔てた広域交流の提案

「内陸部のまち・横手市増田と海辺のまち・福岡市姪浜～日本海を隔てて 1100 ㎞離れた地域の新たな交流の芽生え～」（2013 年　第９回 JTB 交流文化賞応募作品）より抜粋

増田の内蔵との出会い

2013 年８月 30 日、公務員の傍ら、福岡市姪浜で地域活動のリーダーをしている私は秋田県横手市増田にいました。仕事で出張した時の最後の視察地が増田でした。観光物産センター「蔵の駅」で説明を受け、中の蔵を見せていただきましたが、雪国ならではの独特の構法と重厚な造りに圧倒されました。視察はその蔵の見学と 10 分程度の町並み散策だけでしたが、もう少し居残って見てみたいと思い、視察のバスが他のメンバーを乗せ秋田駅に向かう中、私は帰りの飛行機の時間が許す限り、他の蔵を見ることにしました。

（中略）

福岡市・姪浜の蔵と町並み

一方、私が暮らし、まちづくり活動を実践している福岡市の姪浜にも、時代時代の状況に応じて様々な使い方をされてきた蔵があります。築 180 年以上になる江戸時代後期の建物で、戦前までは酒蔵、戦時中は飛行機の部品工場、戦後は味噌の製造・販売、現在はパンの製造・販売及びまちの案内所（地域のまちづくり活動の拠点）として使われ、今でもオーナーが住み続けておられます。また、時にはコンサートや講演会、展示会等のイベント会場になるなど、地域のシンボル的空間となっています。増田の内蔵とは造られた背景、歴史、構造はかなり異なりますが、「蔵」の持つ不思議な縁を感じました。

（※この時に紹介した姪浜の蔵は解体され、現存しない。）

増田の蔵

姪浜の蔵

（次ページに続く）

（中略）

北前船で関係する増田と姪浜

ある蔵で説明を受けている中で、増田は北前船とも関わりがあることを知りました。なぜ、内陸部の増田が北前船と関係あるのか、詳しく話を聞いてみました。

昔、北前船が秋田の港に寄港し様々な物資を降ろしました。増田は雄物川支流の成瀬川と皆瀬川の合流に位置し、秋田の港に着いた物資は、これらの川を使って増田にも運ばれたそうです。当時は食品保存が未熟なため、新鮮な魚は横手のような内陸部には流通が困難でした。しかも秋田は冬が長いため、食品を加工し保存食として冬を越しました。そこで当時の人々は保存食をより美味しく、来客にもてなしたいという想いから、昆布に代表される保存食の加工技術に磨きがかかったということです。

姪浜も江戸時代には廻船業で栄え、五ヶ浦廻船や北前船とも関わりがあります。製塩業や漁業で栄え、藩米を廻送する千石船で賑わったほか、全盛期には江戸、大阪はもちろん東北、北海道にまで船足を伸ばし、江戸幕府や他藩の米、民間の材木、海産物の物流をも担いました。海辺のまち・姪浜と内陸部のまち・増田は 1100 ㎞も離れており、一見関わりがないように見えますが、「姪浜の塩や海産物が増田で消費されていたかもしれない」「増田の昆布を姪浜の人も食べていたかもしれない」など、何らかの交流があったことを想像すると、とてもわくわくしてきます。

江戸時代の交通路（安藤達朗著「いっきに学び直す日本史」に筆者が姪浜と増田の位置を記載）

姪浜　増田

今後の交流に向けて（増田の皆さんへのメッセージ）

急遽決断した４時間足らずの増田滞在でしたが、とても有意義な時間でした。「蔵」や「北前船」が取り持つ縁、これは決して偶然ではないと思います。私を増田に引き寄せたもの、それは「増田にはこれからの日本の社会、そして姪浜の地域づくりを考えるヒントがたくさんある」ということを私に伝えたかったのではないでしょうか。こうした縁を大切にし、日本海を隔てて遠く 1100 ㎞も離れた増田と姪浜で「地域づくり」や「町並み」「観光」をテーマに新たな交流が生まれればいいなと感じています。

最後になりますが、丁寧に説明していただいた増田の皆さん、本当にありがとうございました。福岡市の姪浜から厚くお礼申し上げます。これを機会に「日本海を隔てた広域交流」を始めましょう。